ポケモン不思議のダンジョン～トキタンズ～キャラ設定＆未来編

咲良@葉花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモン不思議のダンジョン～トキタンズ～キャラ設定＆未来編

【Ｎコード】
Ｎ８５３７Ｔ

【作者名】
咲良@葉花

【あらすじ】
これはポケモン不思議のダンジョン～トキタンズ～の未来編兼キャラ設定です。

始まりの森（前書き）

どうも。
トキタンズの未来での生活やキャラクターの紹介をします。
えっと…少しネタばれかもです。今回は未来編です。

始まりの森

これは、未来での話。シークットが記憶を失くすまでの、
彼女の物語。

未来では、時は既に止まっている。しかし、人間達はその中を、
闇に染まったディアルガを王として生きていた。
その中の、一つの一家。その中にシークットは長女として
生きていた。その一家はお金があることで有名だ。
しかし、最近時を再び動かそうとしているとの事で、
王室からは敵視されている…。
（解説もどき：シークット母…シー母。シークット父…シー父
シークット妹…ロザリア）

シー母「ロザリア～。森へ果物取りに行ってくれるかしら。」
ロザリア「え…今日友達と遊ぶ。」
シー父「いつもシークットが行ってるじゃないか。たまには
行ったほうがいいんじゃないか？」

ロザリア「…でも…。」少女はシュンとして下を向く。
すると、ドアが開き、少女が現れる。
シークット「いいよ。私行くよ。」
シー母「でも今日遊ぶんじゃ…。」
シークット「いや、いいよ。シュカリア、遊んできなよ。」
ロザリア「え…いいの？」
シークット「いいよ。私果物取り好きだし。」
少女は笑った。もう一人の少女もつられて笑う。
ロザリア「ありがとう…姉さん。」
二人の姉妹はあまり似ていない。姉のシークットも妹のロザリアも

金髪だが、シークットは少し不思議な色をしている。
顔立ちも結構ちがうので、少し両親からしては不思議だった。

ロザリア「じゃあ、あそんでくるね。」ロザリアは家を出て遊びに行った。シー母「いいの？遊びは。」
シークット「いいのよ。それより何の果物とってくればいい？」
シー母「…そうねぇ…オレンの実と、モモンの実と、ラムの実とヒメリの実と…。」シー父「あとゴスの実で。」
シー母「そうね。おやつ用にね。」シークット「分かった。行ってきます。」森へと向かうシークット。
一方森ではある人物が王室の大臣達に追われていた…。
＊「クソッ…ここに隠れるか…。」草の陰に姿を消す誰か。
足をやられているのだろう。毒の所為で血が止まらず、
苦痛の表情を浮かべている。
そこに、王室の大臣とその他と思われる人が現れた。
＊「取り逃がしたか…？森の中を徹底的に探せ！！」
＊「イエッサー！！」バラバラになる。しかし、
まだ油断は出来ない。その、森のなかにシークットは足を踏み入れた。
シークット「♪～♪～～。」キメラはモチロンいる。
しかし、キメラ達のいる場所さえ分かればたやすいものである。
すたすた。と森をすすみ、木の実が実っているところへと向かう。
シークット「今日はやけに静かね…。」
独り言を言いながら足を進める。誰かの影が見える。
シークット「（げ…、王室の大臣の…ヨノーレ…だっけ？私
苦手なのよね…見つからないように…。）」
努力もむなしく、見つかってしまう。
ヨノーレ「おや、シークットさんではないか。」
シークット「こんにちは。ヨノーレ大臣。貴方も果物狩りですか？」
（解説：ヨノーレ…ヨノワール）

ヨノーレ「いえいえ。指名手配されている者がここに逃げ込んだので。」シークット「…指名手配…かぁ…。」
“王に逆らうものは死刑。”そんなルールがあった。
モチロン逃げれば指名手配となる。なんでもその指名手配された人は時を再び動かそうとしているらしい。
シークット「（でも…時が動いていたほうが…世界は綺麗なんじゃない？）」ヨノーレ「凶悪犯ですからね。貴女も気をつけて。」

シークット「えぇ。十分きをつけるわ。」
さっさとヨノーレのいるところ去り、木の実がある所へと向かう。
シークット「着いた。」
色とりどりの木の実が実る。シークットはこの場所は好きだ。
木の実を一つ一つもぎとりながら、ふと考える。
シークット「（そういえばお父さんとお母さん時を動かすのに賛成派なんだっけ？）」一通り木の実を採った後、少しの好奇心で森を探索することにした。
シークット「キメラのいる場所さえ通らなければ平気よね。」
草を掻き分け歩いてゆく。…すると、滝が出てきた。
シークット「こんな場所あったんだ…。」
一つ、陽に照らされているところに何かがある。
シークット「…なんだろう…？腕時計？ちょっと違うかな…。」
などといいながら、それに、触れた。

未来編　一話　クリア

始まりの森（後書き）

未来…かぁw
次回はキャラ紹介をいれます。
交互に更新していきますね。はい。では、また次回。

☆キャラ設定第一回（前書き）

え～と、キャラの設定についてです。
別に見なくてもそのうちうっすら分かるかもですねw

☆キャラ設定第一回

キャラ設定　第一回、重要キャラ（前半）

・シークット（主人公）…根っからの鈍感&純情。やさしいが、挑発がかなり得意らしい。
趣味は、いまだ良く分からない。最大の長所であり短所は、
人前では全く泣かない。だが、彼女の涙を見た者は一人居るらしい。
嫌いな人にも嫌いとは言えず、自分の意見をあまり主張できない。
一人称…「私」語尾…「～よ。」「～ね。」

・チャマー（パートナー）…モデルポケモン…ポッチャマ。
正義感が強いがチキン（弱虫）でも何故か勇気はあるようだ。
とても単純で短気。しかし、人思いで結構優しいが、流されやすい。

・バルーン（ギルド親方）…モデルポケモン…プクリン
普段は子供っぽくて優しいが怒ると怖いらしい。
じつは、純情“ぶってる”いつもは可愛らしいフードを
かぶっていて、少年に見えるが、フードをとれば歳相応に見える。
実を言うと、歳はちゃんと大人ですw

・ラープ（親方の一番弟子）…モデルポケモン…ペラップ
厳しいがいつも皆のことと、我侭なバルーンの事を思っている。
あ、要すろにツンデｒ…げほん。根は優しい。

・風（ギルド女性メンバー）…モデルポケモン…チリーン
優しく仕事熱心。だがたまに入る暴走がすごい。
夕食や、ギルド内での仕事が多い。

・キマリア（ギルド女性メンバー）…モデルポケモン…キマワリ
明るく、元気な奴。常にドガールとは口げんかをしている。
が、なんだかんだで仲はいいと思う。

その他（モブに近い存在。）
・ドガール…ドガース。・グレール…ぐれっぐる。ヘイニー…ヘイガニ。
→多分この子達はあとで見せ場が来ると思います。

☆キャラ設定第一回（後書き）

次回公開するのは、
ジュプトル（名前違う。）ヨノーレ（ヨノワール。）
などの、後半の重要キャラです。
あと、未来編でのキャラも紹介します。
次回は未来編第二部です。では。

人命救助。それは犯罪？（前書き）

どうもです。
えーと、ここであのお方の名前が…でますかねえ。
出るかもです。では！

人命救助。それは犯罪？

その、触れたものをそっと、手に取ってみる。
シークット「腕時計じゃないみたい…。」
と、その途端、腕時計のようなものが光りだした。
シークット「まぶしっ……！」

次に目を開けたとき、何故か自分の手首にそれがくっついていた。
シークット「え〝。どうしよ…取れない…。」
取ろうとしても、皮膚と同化しているかのように、
引っ張ると痛かった。
シークット「…いいや。もう。」
帰り道を辿ろうとした。そのときだった。
ガサッ…と、草むらが揺れた。
シークット「え…。（え？ま、キメラ？此処生息地じゃない筈…。）」

恐る恐る、近づき、草むらを掻き分ける。
すると、そこには青年が倒れていた。多分毒による多量出血のせいだろう。

シークット「…！！！やだ！人が…助けなきゃ。」
草むらに入り込み、さっき取ってきた木の実を取り出す。
シークット「毒には…モモンの実よね…。あと、包帯と…。」
なんとか応急処置を終えたシークット。

シークット「（どうしよう…、このまま放って置いたら…、だめよね。）」

少し考えるシークットそのとき、青年の目が薄く、開いた。
＊「う……。」
シークット「あ、生きてた。良かった…。」
＊「オマエ…誰だ…。」シークット「（ここら辺では有名な筈なんだけど…えっと、
お父さんの名前言えば分かるかな…。）」
＊「オマエも…あの大臣の手下か…？オレを捕まえに着たのか？」
シークット「いや、違うけど…、もしかしてあの指名手配の？」
＊「あぁ。そうだ。」シークット「（殺されない…よね？）」
シークット「大丈夫。私はあんな大臣に騙されたりなんかしないわ。」
＊「しかし何故オレの手当てをしたのだ？」
シークット「…倒れてる人を放ってなんて置けないよ。」
シークット「あ…指名手配…えっと、名前…なんだっけ？」
リーフ「リーフだ。ディアルガ反逆の罪で追われている。」
シークット「時…動かそうとしてるんだよね…？」
リーフ「あぁ。そうだが。そういえばオマエの名前は？」
シークット「シークット。」
何故だか、恐怖心は消え、この人の手助けを出来れば…などと思っていた。
そのとき、足音が聞こえた。
ヨノーレ「ここにもいないのか…。何処へ逃げたんだ…！」
シークット「（ヨノーレ…！）」
息を潜める。そのうち、ヨノーレは此処を去った。
シークット「…どうするの？これから。」

リーフ「…分からない。手がかりは相変わらず見つからないし、此処に、時空のブローチ
（時空の紋章ともいう。）があると聞いてきたが…。」

＝＝＝＝＝＝＝＝一方、家。

シー母「どうしましょうお父さん。シークットが帰ってこないわ！」
シー父「まさか…森に逃げたとか言う指名手配と出くわしたか…？」
父と母が心配をしていた。

人命救助。それは犯罪？（後書き）

中途半端なところでごめんなさい！
時間が…ｏｒｚ
頑張ってもっと書ける様にします。英検もうどーにでもなーれ☆

☆キャラ設定第二回（前書き）

どうもです。
今回は色々と後半の重要キャラの設定です。
では。

☆キャラ設定第二回

後半　重要キャラ。

・リーフ（未来編でのパートナー）…モデルポケモン…ジュプトル
滅多に笑わない。（鼻で笑ったりはあるけど。）
優しいけど不器用（↑重要）
少し可愛そうなキャラクター。

・ヨノーレ（敵。）…モデルポケモン…ヨノワール
しつこくてうるさい。

・レビア…モデルポケモン…セレビイ
活発な子。※この物語だと、伝説のポケモンがモデルなのに、
あまり普通の子と変わりません。ごめんなさい；

恋愛フラグについて…。

決定しました！
まだいえませんが、かなり主人公がモテモテになるかもです。

シークット「…ヨノーレの扱い酷くない？」
そう思った人多いと思います。

じつは、ヨノワールはあまり好きではないです。
ヨノワール好きな方ごめんなさい＞＜！もう少しましにしたいと思います。
では。

☆キャラ設定第二回（後書き）

あぁあ…英検＾ｐ＾でした。
ま、それはさておき、ヨノーレ（笑）
は随分としつこく、未来編で多分しつけぇｗ
と言いたくなるほどしつこいです、&ちょっと…残酷（？）です。

私の歯車

シークット「時空のブローチ？ビスケットみたいな？」
リーフ「…食べ物じゃない。」
と言うと、詳しく説明をしてくれた。
…要すろに、それを持つと、全属性の技を使えるようになる…らしい。
その他にも色々と特典があるらしい代物だそうだ。

リーフ「…で、この森にあるって言ってきたんだが…。」
シークット「ねぇ。」リーフ「何だ？」

シークット「それってこんな感じ？」と言って、右手首を見せる。
リーフ「おぉ。確かそんな感じ…って！なんでオマエが持ってるんだ！？」

ノリ突っ込み…だと…！？
心の中の考えを必死に押し殺す。ついでに笑いもかみ殺した。
シークット「…あの、質問。ブローチって腕に引っ付くものだったの？」
リーフ「いや…引っ付くはずはないんだが…まさか…。」

少し、神妙な顔になる。
シークット「…何？」
リーフ「…よく、見せてみろ。」右腕をまじまじと見る。
そして、引っ張ってみる。案の定、皮膚も引っ張られる。
リーフ「…まさか…同化してるのか…？」
シークット「いたい痛い痛い痛い。。。」
しかし、耳に入っていない。リーフ「まさか…こんなことが…。」

シークット「いぃぃ……つぅ…。」やっと、開放された。
リーフ「見たところ、オマエと時空のブローチが同化している。」
シークット「どーか？それ、おいしい？」

リーフ「喜ばしいことだが美味しくは無い。」
リーフ「物は人を選ぶっていうだろ？」シークット「うん。」

リーフ「…つまり、オマエが選ばれたワケだ。」

シークット「…？私が…選ばれた…？」
すこし、というか、戸惑いが隠しきれない。
少し、というか、かなり、不安になった…。

何故か、何か、このブローチによって私の歯車が狂う気がする。
本能的にそう悟って“しまった”。

……悟らなければよかったのに。
こうなるの、分かってたんでしょ…？

☆色々設定

こんにちは。どうも、作者です。
今回は、世界観などについての説明です。

殆ど、私の妄想です。
でも、不思議のダンジョンの世界観はそのままです。

ギルド…ギルドについては、本家様と殆ど同じですが、
浴槽（男女別）、医務室、その他（ベランダ？）など、
結構都合いいように改造してありますw

ダンジョンについて…主にキメラの住処です。
本家様のダンジョンとはあまり変わりません。
しかし、本家様でいうモンスターハウス
に入らなければ、殆どキメラとは顔を合わせ
ません。

キメラについて…怪獣、猛獣と思っていただき結構です。
※ポケモンではありません。

ポケモンについて…伝説のポケモン辺りは、（ユクシー、アグノム、
など）
そのままポケモンでいいと思います。
…擬人化ばかりではつまらないですしね（笑。

時空のブローチについて…まぁ、未来編での説明どおりですね（笑。

全属性が使えるようになります。
後は、色々なちーと機能がついてきます。

コレくらいでしょうか…。そのうちも色々と更新していきますね☆
では！

不幸中の幸い…？（前書き）

どうも。
えっと…すこし忙しいので、
更新がまたかなり亀ペースになります。
ご了承ください…。

不幸中の幸い…？

シークット「ねぇ。で、どうするの…？」
リーフ「これからか？なんとか振り切るつもりだが。」

シークット「…ヨノーレの手下何人だと思ってるの…？」
そう、この森のいたるところにヨノーレの手下とヨノーレがいる。

リーフ「……あー…。」考え込んでいるようだ。
ふぅ。と息を吐くシークット。
シークット「…助けようか？」

リーフ「…何故おたずね者のオレを助けようとするんだ？」
シークット「それ…さっきも聞かなかった？」

息を吸うと、少し懐かしげな、悲しげな笑顔で言った。
シークット「倒れている人を、放っておく訳にはいかないじゃない。」
シークットにも、誰か知らない人に助けられたことがある。
それが、忘れられなかった。

小さい頃だった。
家柄がいいという理由もあり、この暗い時代。
誘拐や犯罪が多発していた。
今もだが。
ある日、一人で出かけたシークットは、誘拐されそうになった。
それを、誰か知らない人が助けてくれた。
その人の強さが今も忘れられず、あこがれている。
そして、今に至る。

シークット「おたずねものとか、そんなん関係ない。只、一人一人の人間が生きている。それだけ。」
リーフ「…。」すこし、驚いたようだった。
シークット「人の命を奪う権利なんて誰も持っていないわ。」

リーフ「…そうか。助かる。」少し笑うリーフ。
薄く笑うシークット。

リーフ「…で、どうするんだ？」
シークット「…魔術よ。」リーフ「ま…じゅつ？」

シークット「おいしくはないよ？」リーフ「それは知っている。」
リーフ「で、どのような魔術を使うのだ？」

シークットは、少し考え、そして答えた。
シークット「透明になる。」リーフ「出来るのか？」

シークット「えぇ。私は透明にならないよ？」
少しの作戦会議中。

リーフ「…オレをこの森から逃がしたところでどうするのだ？」
シークット「私の家来る？」唐突な質問。
は？と少し固まった。
リーフ「いや…捕まるだろ。おたずねものだし…。」

シークット「…大丈夫。」
この言葉は少しの確信によるもの。

魔術を使って、リーフを透明にした。
シークット「…動ける？」リーフ「あぁ。」
草むらを出て、森を進んでいく。
確かに、ヨノーレの手下の姿が目立つ。

少し早足で森を出た。

シークット「…ついてきてる？あと少しね。」
リーフ「…分かった。」
とことこ、と家へと戻る。もう夕方だ。

ガチャ。シークット「ただいま。」
シー母「おかえりなさい！心配したわよ！？」
シー父「大丈夫か？」　シークット「木の実はちゃんと取ってきたよ。」

そうそう、とシークットは口を開く。
シークット「お父さんとお母さん、匿って欲しいの。」
一つの部屋。シー父とシー母とシークットとリーフ。四人がいた。

シー父「…で、助けたわけか…。」考え込む父。
シー母「どうしておたずね者なのかしら？」たずねる母。

シークット「この人は、時を動かそうとした罪、
つまり、王反逆罪で追われているの。助けてあげられない？？」
シー母&父「…！時を…！？」驚いた目をする両親。

シー母「…方法を、知っているのかしら？」
リーフ「あぁ。大体分かった。」
シー父「……時が、本当に動くのか？」リーフ「えぇ。」

考え込んだ後、父が、口を開いた。

シー父「よし、協力してやろうではないか。私も、太陽とやらを見たいからな。」

シークット「…有難うございます。」リーフ「…すまないな。」
家で暫く匿った。
ロザリア「…？そっちの人は？」
シー父「ん？パパのお友達だ。暫くここに泊るらしい。」

＊＊＊＊＊リーフ視点＊＊＊＊＊＊
何故だか、その一家は温かくオレを迎え入れてくれた。
オレを助けたシークットというヤツは、何者だ？
暫くオレは此処に泊った後、ヨノーレたちが去った森の一角に、隠れ家を作って過ごすことになった。

シー父「何か不自由があったら言ってくれ。」
リーフ「大丈夫だ、わざわざすまない。」
シー父「いやいや、こっちこそ色々と教わったからな。」

此処で、隠れて過ごしながら、オレは時を動かす方法を更に追求する。
家で、ぼそり、と独り言を言った。
リーフ「…そういえば。」
ロザリアは、どっち側の人間なのだろうか。
何か、アイツは少し違和感があった。
リーフ「…気のせいだな。」

そういえば、シークット。アイツ、本当に何者だ？
…何故か、あの笑顔が、自分の心の中にずっと残っている。

この感情はなんだろう…と考え込むリーフ。
一つだけ、なんか当てはまりそうな感情があったが、それも、
リーフ「…気の…せいだな。」
……。
リーフ「…疲れてるんだ。多分。早く寝るか。」
毎日、こんな感じだが、色々と収穫はあった。
ほぼ毎日シークットが木の実取りのついでにきたりもする。
そんなこんなで、眠りについた。

＊＊＊＊戻ります＊＊＊＊＊

リーフが隠れ家に住み始めてから数日。
シークット「……なんでかなぁ…。」
何故か少し妹の様子が変だ。木の実取りを渋るのはいつもだが、
出かけるのが多くなったような気がする。

そんなことをぶつぶつ呟きながら、今日も木の実取りへと出かけた。
そこで、少し驚くべき情報が耳へはいった。
シークット「…！暗殺…！」
リーフ「あぁ、何者かが、お前ら一家の暗殺を考えているらしい。」
シークット「……そう…か。」自分の家も少し疑われているんだ。
仕方ない、と心に言い聞かせる。

リーフ「…いずれも、ヨノーレの手下あたりだと思う。」
シークット「…ねえ。」リーフ「なんだ？」

シークット「殺しちゃっても正当防衛だよね？」
少し怖い言葉を真顔で言ってしまうシークット。
リーフ「…そうかもな。」

シークット「ん、もうすぐお昼か。じゃあ私帰るね。」
リーフ「あぁ。そうだ。」シークット「ん？」

リーフ「危なくなったら、両親も全部連れて俺のところに来てくれるか？」
シークット「……らじゃ！」

このときは、嘘だと思っていた。信じていた。
でも、リーフが嘘をつくとも思えなかった。

＊「えぇ、その通りです。」　＊「…殺せばいいのね？」
＊「はい。あなたにしか出来ない仕事です。」
＊「…本当にいいのね？」
＊「えぇ、頼みましたよ？反逆者を処罰するためにね。」
＊「っ…、」＊「では、よろしくお願いします。」

……＊「…ッ　…お父さん、お母さん、姉さん…ごめん。」

私、コレしかないみたい。
だから、許して？

殺しちゃうけど。

＊「あはは…、私が正義なんだ…！！」

不幸中の幸い…？（後書き）

誰かがやんでますね…。
多分次回辺りにもうグロ注意報かもです。
では。

月夜の悲劇※流血アリ（前書き）

流血てか死亡ねた注意です！

月夜の悲劇※流血アリ

…それから、数日たった。
私は、いまだにお父さんとお母さんに言えてない。
それは、二人も気がついているだろうし、私の口からじゃ、とても…。
……でも、私が言わなかったら、二人とも…、
“殺される”かもしれない。

部屋で、考え事をしているシークット。
もう、夕食の時間も近い。そのときに言おう…。
シークット「…意気地なし…私。」
隣の部屋の鍵が開いた。たぶん、ロザリアだろう。
扉越しに話しかけた。

シークット「ん～？ロザリア？」
ロザリア「っ！！姉さん…、どうしたの？」
なんだろう、ロザリアの声が少しどうてんしている。
いきなり話しかけられたからだろうか。
シークット「もう夕飯だった？」ロザリア「ま、まだよ。」

ロザリア「…少し水でも飲んでこようと思って。」
シークット「そう…。」部屋に、寝転んだ。
そういえば、ロザリアの様子が変ね。
…ロザリアも知ってるのかな…。

シークット「そういえば、時空のブローチだっけ？」
と言いながら、右手首を見た。

シークット「…？？？」
何故か、その時空のブローチとやらが、紅く光っている。
“危ない。”シークット「……え？」
脳裏に、誰かの、いや自分の声が聞こえた。
そのとき、1階で悲鳴が聞こえた。

シークット「え？？お、お母さん！？」
急いで階段を降りる。
バン、とリビングの扉を開けた。

シークット「……ぁ…。」
目に映ったのは、部屋を染めている、赤。
シー母「し…シークット、逃げなさい！！！」
こんなときにも、自分をおいて逃げろ、という母。
そして、頭を二つに割られて、部屋を赤に染め既に事切れた、父。

シークット「…お父さ…お母さん…。」
ロザリア「……姉さん。」
そして、大きな鎌のような物を持っている妹。

シークット「…！ロザリア…。」
う…そ…でしょ？
何かの間違いだよね？ロザリアがお父さんを、お父さんを、
“殺した”なんて…。
シークット「夢…だよね。夢だよね。これが、リーフの
言っていた、暗殺？」
独り言のように零す言葉。涙とともに。

ロザリア「…違反者を片付ける。それが私の使命。」

大きな鎌を振りかぶる。

シークット「お母さん！！！」
駆け寄るのも遅く、もう鎌は振り下ろされて、
また、部屋が赤に染められる。
ピチャ…と、自分の顔にまで少量の母の血がかかる。

…母は、もう首と胴体が切り離されていた。即死だ。
その場に、呆然と立ち尽くす。
自分の中が、疑問と、怒りと、戸惑いと、何かが浮かんでいた。
“逃げなきゃ”そんな自分もいたけど、
“両親と一緒に…”という自分もいた。
ロザリアが、ゆっくりと、振り返る。
ふらり、と近づいてくる。

“戦って”だれか、又は自分の声が聞こえた。
丁度よく置いてあった、短剣（ナイフ）
とっさに手に取り、実の妹（ロザリア）へと向けた。

ロザリア「それで、勝てるとでも？」
シークット「……わからない。私を殺す気？」
ロザリアは笑った。まるで、感情をなくした人形（マリオネット）
の様に、冷酷な笑みを放った。返り血を浴びた体で。

シークット「…、」
落ち着け、私。殺さなければ大丈夫。
相手は大鎌、スキはある筈。
ヒュウ、とロザリアが動いた。
シークット「（速っ！！）」とっさに避ける。
チッ、と舌打ちをするロザリア。

シークット「…はぁ…、そういう子に育てた覚えはなかったんだけどな…。」
と、心の内の思っていた部分がポロリ、と出てしまうシークット。

ロザリア「アンタに育てられた覚えはない。」
大鎌を振りながら、ロザリアが言う。
多分、心の生易しい部分がはがれたような気がした。
シークット「…るさいわね、出来損ない。偽善者のつもり？」
心の底の、真っ黒な自分が表へと出向く。

ロザリア「ッ…！」悔しそうに歪む。
シークット「大体さ、何でこんなに姉妹で違うのかしらね。」
戦闘を続けながら、話すシークット。
シークット「容姿も、口ぶりも、まぁ、似てるって言われるの嫌だからどうでもいいけどさ。…考え方も、アンタさ騙され易いよね。」
ハハッ…と鼻笑いのような笑いをする。

ロザリア「るさい…うるさいッ！！！」
一気に大鎌を振ってくる。
シークット「（やば、頭かち割られちゃう…。）」
そして、次の瞬間。

ザシュ、と切れる音。
そして、飛び散る血。
ロザリア「チッ、はずした。」
なんとか頭はかわしたものの、右足をやられた。
ついでに左手も少し切れ、ナイフが落ちてしまった。
シークット「〜〜〜！！」

“全属性の技を使えるようになる”　“その他にも色々と特典があるらしい”
脳裏に、時空のブローチの説明が流れた。
魔術も一応あるが、使えるほど体力が残っていない。

シークット「…（で、属性の技って、どうやって使うんだっけ。）」
完璧に、死亡フラグ。大ピンチ??でも一応顔は余裕の笑み。

ロザリア「ふん、これで最後。」
大鎌を振り上げた。
シークット「（…あ、そうだ。）」
手を、ロザリアに向けた。シークット「とう。」
なぜか、自分の右手から、変な雷の剣（?）
が出てきて、ロザリアの、腹を貫いた。

シークット「…ぁ。」
殺す気はなかった。
でも、でも…、死んで…ないよね…?
ロザリア「ゴフッ…。」血を吹いて倒れたロザリア。
シークット「あ…ろ…ロザリア…?」
ぴくりとも、うごかない。
腹の辺りから、血の水溜りが。
…いや、血溜りか。

一気に、家族を亡くした。
シークット「ッ…〜……。」
泣いた。家族の前で泣いたことの無いシークットが、
家族の前で初めて泣いた。家族の“亡骸”の前で。
暫く泣いた。

シークット「…これから…どうするの…？」
部屋を、見回した。
血で赤に染まって、既に部屋、という原形がない。
シークット「……。」
どうしよう、これが暗殺だったとしたら、
私は間違いなく狙われる。
混乱して何も動かない頭の中で考える。
足の出血と腕の出血が酷い、意識が、飛びかけた。

そのとき、窓が割れた。
シークット「！！！！！！」
とっさに近くのクローゼットに隠れた。

ヨノーレ「あらあら、酷いありさま。」
と言いながら、ロザリアの所へと向かう。
ロザリア「…ヨノーレ…。」
ヨノーレ「殺した様ですね。Sは？」
ロザリア「…逃げただろうけど、あの出血だと死ぬ。」

…Sとは、自分のことを言っているのだろう。
ヨノーレ「傷の処置をするので、場所を移動しましょう。」
ロザリア「ええ。」ヨノーレ「立てますか？」
ロザリア「立てるわよ。」

どこかへと二人は消えていった。
多分、自分は妹とはもう分かち合えないだろう。
…一緒に笑いあうことも。

シークット「…！」ある人物の言葉がよみがえった。

“危なくなったら、両親も全部連れて俺のところに来てくれるか？”
…いや、家族、明らかに連れてけない。
でも、近いうちに、リーフも危なくなる。

シークット「…伝えなくちゃ。」
魔術を少し使い、感覚を麻痺させる。
これしきの魔術なら、あまり魔力は使わない。

そして、割れた窓から、森へと走っていった。
シークット「…ッハア…げほげほ！」
結構走った。
精一杯、涙を見せないように、ぬぐった。
だが、血まみれの服のまま。

コンコン、
突然、リーフの家の扉がたたかれた。
リーフ「…誰だ？こんな夜遅くに…。」
独り言を言いながら、扉へと向かう。
大体、リーフの家に訪れるのはシークットとか位しかいない。

リーフ「…！まさか…。」
ガチャ、と扉を開いた。
案の定、シークットがいた。
…血まみれで。
リーフ「…！」
精一杯笑顔を作ろうとしているのだろう。
しかし、泣いた跡と恐怖が隠しきれていない。
シークット「…ごめん、リーフ。」
ナゼ、コイツはこんなに涙を堪えるのか？
…ナゼ、強がる？

何故か、何かの感情が心の中に生まれた。

リーフは、気がつくとシークットに抱きついていた。
シークット「！！！」
リーフ「…大丈夫だ。」
その一言に、気が緩んだ。
シークット「リー…フ…。」
リーフ「馬鹿。あんま溜め込むなよ。」

シークット「うわあぁぁ……。」
泣いた。

しかし、
リーフは、どうしたらいいのか、さっぱりわからなかった。
暫く、泣いた後。
シークット「ごめん。」
と、大分マシになった笑顔。
リーフ「…あぁ、ってオマエ、傷大丈夫か！？」
今も、血が流れている。

シークット「感覚麻痺させてるから…痛みはないけど。」
リーフ「…手当てしたほうが良い。とりあえず、入れ。」
家の中、手当てをしながら、
家でなにがあったか、これからどうするかを話し合っていた。

リーフ「で、刺客は誰だったのか？」
シークット「……ロザリア。」いいにくそうな顔。
リーフ「…やっぱりな。」どうやら、勘付いていたようだ。

シークット「どうして？」

リーフ「あぁ、ロザリアとヨノーレが会っている所を見た。
だが…、オマエらに言うのは少し抵抗があって…。すまない。」

シークット「…大丈夫。過ぎたことだし、言っても私信じなかっただろうから。」
笑った。
そこからが、トキタンズ未来編の始まり。
記憶を失くすまで、何があったのか。

月夜の悲劇※流血アリ（後書き）

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！！！！
唐突に恋愛ねた入れてごめんなさい！！
…実は、書くのにすっごく戸惑いました。
あぁあああああ！！もう！私のＢＡＫＡ！

☆第三回キャラ紹介

今回は各キャラクターの語尾を紹介します。

シークット…「～よね」　「～よ」　「～だわ」

チャマー…「～だよね」　「～だよ」　「～だね」

リーフ…「～だな」　「～だ」　「～だろ」

バルーン…「～だよ♪」　「～だ♪」　「～だね♪」

ラープ…「～だな」　「～だ」　「～だろ」（機嫌がよければ♪がつく）

風…「～です」　「～ですよ」　「～ですね」

キマリア…「～ですわ」　「～ですわよ」　「～ですわね」

ヨノーレ…「～だな」　「～ですな」　「～ですね」

あと、グレール、ヘイニー、ドガールの紹介です。

グレール…（モデルポケモン、グレッグル）
本家でもお分かりの通り、グヘヘと笑う
でも悪いやつではありません。
語尾：「～だな、グヘヘ」

ヘイニー…（モデルポケモン、ヘイガニ）

これまた本家の通りです。
意外とチキンなのです。
語尾：「～だぜ！ヘイヘーイ！」

ドガール…（モデルポケモン、ドゴーム）
本家の通り、目覚まし時計さんです。
なんだかんだ、キマリアと仲がいいw
語尾：「～だぜェ！」

よし、以上です。久々の投稿でした！では！

プロローグ終了、止まった世界へ。（前書き）

実はココから本編。
いやぁ、プロローグ長すぎますねｗ
では！

プロローグ終了、止まった世界へ。

そして、二人ともなんとなく落ち着いたころ。
シークット「いたぁっ……。」
感覚を麻痺させていた結果、今痛みがきている。

リーフ「っはぁ…、魔術なんかで痛みを無理に抑えるからだ。」
と言いながら、紅茶を飲みつつ、痛み止めを探しているリーフ。
シークット「あの…あとさ…言いにくいんだけど。」

リーフ「ん？何だ？」
シークット「服、どうしよう。」
リーフ「ブッ！！！！オレに言うなよ…。」
飲んでいた紅茶を盛大に吹いてしまった様だ。

シークット「タンスあさってていい？」
リーフ「いや、男物しかねぇぞ。」

シークット「それをなんとかするのが私。」
リーフ「それが元お嬢様のすることか…。」
と言いながら、元の痛み止めを探す作業に戻るリーフ。

シークット「イタタ…。」口々に言いながらタンスをあさる。
案の定、女ものなどあるはずが無い。
シークットはその中から、頑張ってそれらしいものを見つけた。

シークット「裁縫セット発見…ようし。」
何をするのかは、たぶん分かるだろう。

シークット「お裁縫は得意だから平気よね。」
しばらく経って、痛み止めをみつけたリーフが部屋へと入る。

リーフ「入るぞ。」シークット「どうぞ。」
ガチャ、と開けると、裁縫をしているシークットが目に映った。

リーフ「オマエ…裁縫出来たのか…。」
シークット「おふこーす、あ、勝手に服縫っててごめんね。」
リーフ「あぁ、平気だ。それは兄貴からのヤツだから。」

ふぅん、お兄さん居たんだ…と言いながら、ちくちく縫っていく。
リーフ「ん。」シークット「？」
リーフ「痛み止め。」助かったように受け取るシークット。

ココには季節も、時間も、朝も昼も夜も無い。
動いているのは、人だけ。
その中で、動かない中でも、
人は、
笑って、　泣いて、　楽しんで、　恋をして、
普通の生活を送ろうとする。

痛み止めを受け取り、痛みを抑えたシークットは、手早く作業を終えた。
シークット「よし、完成！」リーフ「おぉ。」

シークット「よし、着替えるかな…。」
リーフ「あぁ、すまない。今出る。」

ガチャ、背で扉が閉まる。

シークット「うわッ！意外と大きかった…まぁいいや。」
リーフ「着れたか？」シークット「うん。」

ガチャ、と部屋から出てくるシークット。
確かに違和感は無い。
しかし、腕と足の包帯が少し痛々しさを強調していた。

ふと、振り返るシークット。
シークット「さて、今日も仕事終わったし、寝ようかな…。」

つづく。

決意（前書き）

えぇっと、タイトル思いつかなくって…すいません；
思いっきりベタになってます。
てかもはや普通にキャラだけ借りてる小説ですね。
※キャラ崩壊警告発令！

決意

シークット「さて、今日も仕事終わったし、寝ようかな…。」

寝室にて。

リーフ「だから、オレはハンモックで良いからオマエはベット使えって！」

シークット「駄目だよ！風邪ひくよ？」

何故かありきたりなベタな展開になっていた。

リーフ「オマエ怪我人だろ。」

シークット「だから？」リーフ「とりあえず、さっさと寝ろ。」

シークット「いやだからね？お話聞いてよ。」

リーフ「なんだ？」

シークット「私怪我人なのは分かってるけど、それでリーフが風邪引いたら

二人とも戦えじゃない？」

リーフ「あぁ、そうだな、それで？」

シークット「その戦闘不能の二人のところにヨノーレ達が押しかけてきたら？」

屁理屈が得意なようだ。

リーフ「…それも、そうなんだが…。」

シークット「それでもハンモックで寝るって言うのなら、

私がハンモックで寝るけど。」

リーフ「だから、怪我人の自覚を持てって！」

シークット「あ、分かった！」

なにかに気がついたようだ。

シークット「私がそんなに体面積があるからかな。」
どうみても太ってなどはいない。
リーフ「ちげぇよ…。」
ベットはそこまで狭くも無い。二人くらい余裕だろう。

リーフ「（こうなったら最後の言い訳をするか…。）」
リーフ「オレ、寝相悪いから蹴飛ばされるがそれでもいいのか？」
シークット「大丈夫、昔飼ってたガーディに勝るのはないよ。」
昔、相当寝相の悪いガーディを飼っていたらしい。

リーフ「いや、オレが蹴飛ばしたひょうしに傷が開いたらどうするんだ。」
シークット「トップシークレットていうか、大丈夫。奥の手がある。」

わんやわんやなどとまではいかないが数分の言い合いの末、
さて、どちらが折れたのだろうか。どうやら、リーフが折れたようだ。

シークット「お休みー。」リーフ「…あぁ。（どうしてこうなった）」
シークットは疲れていたのか、すぐに寝息をたてた。
リーフ「…（ハンモックに戻るか？）」
迷うリーフ。一度戻ろうか…と動こうとした。

シークット「……死なっ…で……うぅ…。」
どうやら、隣で魘されている。
さっきの会話で忘れていたが、コイツは…。

改めて思い返してみると、不安だったのかもしれない。

リーフ「…ふぅ。」
ぼすっ、とベットに再び寝転がる。
リーフ「（なんなんだよ、オレは…馬鹿か…？）」

シークットは相変わらず魘されている。
何なんだろう、この気持ちは。
複雑で自分でも理解できないくらい、気がついたら考えている。
何故だろう、普通に一緒にいるだけで、心が軽くなるというか、
うれしい…というか。
逆に、違うところにいるときは、
不安で、なんだ？心が不安で不安で。
この気持ちは…？
リーフ「（はぁ…。）」
呆れながらも、何かと世話を焼いてしまう。
シークット「…う……忘れっ……く…。」

相変わらず魘されている。
少し頭を撫でてみる。少し、表情が和らいだ…気がした。

ヘンな夢の中、私は、全てを失った。
最後の希望さえも。
シークット「死なないでよ……。」
ここはどこなの？
分からない…。分からないよ…。
全てを失った原因に向かって、叫んだ。

シークット「…私は忘れないよ。貴方が私の全てを奪うのなら、
奪われる前に殺す。出来るだけ人の命は奪いたくない

の。

だから…現実に来ないでね？お願い…。」

失った原因はなにも言わず、消えた。

どこか優しくて温かい…、なにかが触れた。

この世界には朝昼夜はない。なので人々は時計のみを頼りにして生活している。

時計が、朝、という時刻をさした。

リーフ「……朝…、か。」

体を起こす。すると、何かにぶつかったようだ。

リーフ「……？…あ、そうか。」

シークット「…ｚｚ……。」

起こさないように台所へと向かい、朝食を作る作業を始めた。

暫くすると、シークットも起きたようだった。

シークット「おはようー…。」リーフ「あぁ。」

朝食をとったあと、

一応どう調査などをするかを話し合った。

シークット「…で、時の歯車が必要なのね？」

リーフ「そうだ…ただ…。どこにあるかが分からない。」

シークット「ふむ…。」リーフ「”あった”という情報はあるんだが…。」

さて、これからどうなるのか。

全く予想していなかった方向へと既に答えは移動していた。

つづく？

決意（後書き）

ふぅ…駄目だ。
夏ばて気味です。今考えてみると兄弟みたいですねw
まぁいいか…。とりあえず本家要素も少し入れてきます。

☆ちょっとした説明&おまけ会話。（前書き）

※パンツネタ注意！
※キャラかなり崩壊注意報！

☆ちょっとした説明&おまけ会話。

こんにちはこんばんはおはようございます。
適当にこの小説内での人間関係を紹介します。
皆様見たとおり、
レビア（セレビィ）×リーフ（ジュプトル）
というカップリングはありません；
え…？だって、マイナーな方がいいと思ったんですよ。
王道だとつまらないじゃないですか…。
じゃあ、分かりやすく（？）紹介します。
☆シークットが○○に対して。
リーフ…大切なパートナー兼兄弟みたいな友達。
レビア…とてもお姉さんな友達。
ヨノーレ…嫌い。
ロザリア…嫌いでもない。未だに姉としての感情を捨てられない。
闇のディアルガ…いまのところ会ったことがないから分からない。
☆リーフが○○に対して。
シークット…妹のような感じ？でも恋愛的にも見てる。

レビア…面白い奴。すこし口喧嘩もするけどいい友達。

ヨノーレ…一番顔を合わせたくない。常に追っかけられている。

ロザリア…よく分からない。

闇のディアルガ…強い敵対心。

☆レビアが〇〇に対して。

シークット…妹みたいな友達だが、たまに大人びていている。
なんか不思議な子…みたいな？

リーフ…弟のような感じ（↑！？）
…でも恋愛的にも見てる。

ヨノーレ…誰？

ロザリア…この子本当にシークットの妹？と思っている。

闇のディアルガ…会った事はないけど嫌い。

ヨノーレが〇〇に対して。

シークット…生き残っているのをまだ知らない。

リーフ…永遠のらいｂ…（（殴。いつも追っかけている。

レビア…誰？

ロザリア…利用価値がある…と考えている。
闇のディアルガ…自分が忠誠を誓っている。
…忠誠、ねぇw
ロザリアが〇〇に対して。
シークット…もう姉じゃないと言っても、
少し戦うのは抵抗があるらしい。
リーフ…邪魔者と認識している。
レビア…誰？
ヨノーレ…自分が信じている人物。
闇のディアルガ…ヨノーレの上の存在。
しかし信頼はしていない。
闇のディアルガが〇〇に対して。
未決定てか、この子ポケモンですから…；
おまけ（？）なんか会話させてみたかった。
シークット×リーフ×レビアでの会話。
※ちょいパンツネタ注意報。
設定は適当に三人で森を歩いていたとき。
シークット「ねぇねぇ、レビア。」

レビア「何～？シーちゃん？」ふと、足が止まる。

シークット「スカート履いてるけれど、パンツ見えないの？」
レビア「ちょwなんて質問よwwww」
リーフ「オマエラなぁ…。」

レビア「でも私見られても別にいいし。無地だから。」
リーフ「あのな、シークット第一オマエもスカートだろ。」
シークット「あぁ、私は大丈夫。ほら。」

何を血迷ったかはしらないけど、
おもむろにスカートを捲くった。おいwやめろw
で、とっさのナイス判断なのかは知らないけれど、
レビアがリーフの目を隠した。

レビア「スパッツなんだ～。」
シークット「でも歩いてると多分横から見えてた筈…。」
レビア「気づかなかった～！でもこれ可愛いね～！」

なんとなく何が目の前で起こっているか察知したのだろう。
リーフは大人しく目隠しされていた。

レビア「ほうほう…、え？じゃあこの下普通にパンツ？」
シークット「うん。そうだよ～。」
リーフ「（何なんだコイツら…。）」

シークット「？リーフどうしたの？目隠しされてるけど。」
レビア「うん。教育上よろしくなかったからね☆」

シークット「きょーいくじょー？それおいしいの？」

レビア「んふふ～♪残念だけど食べ物じゃないのよ。」
リーフ「いいから目隠しさっさとはずせ。」

シークットがスカートを戻したのを確認したのを
確認すると、目隠しをはずした。

レビア「お！キャンプにちょうどいい場所発見！」
シークット「じゃあ今日はココまでだね。」
リーフ「はぁ…そうだな。」

結果…だめだ私の脳みそ。
実際は皆こんな会話しないよ！！（今の設定では。）

☆ちょっとした説明&おまけ会話。（後書き）

別にスパッツは無くてもいいかなって
思ったんです。でも戦闘シーンとかが一気に
ギャルゲーの一角になってしまうので…；
本編では多分こういうネタはここでしか扱わないかもですwでは・。

過去回想（前書き）

隠れ家とももうすぐおさらばです…。
メタ発言すいません；
では、始まります。

過去回想

前回のあらすじ。
ベタな展開になった。
…で、時の歯車が～～という話になった。

＊＊＊＊＊＊＊
シークット「ふむ、ふむ…。」
リーフ「…で、これが時の歯車の模写だ。」

一枚の紙、そこには綺麗な歯車が書いてあった。
なぜか何処か、心に引っかかった。
シークット「（これ…どこかで…。）」
実際に見たわけではない…、そう、どこかで。

＝いつかの、私が小さかったころ、
家族でどっかに行ったっけ…？
そう、それよ…、思い出して…。
回想＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

シークット「すっごい…。」
シー父「木が大きいだろう。」

シー母「ここら辺は自然が多いからねぇ…。」
多分、あれは引越し先の視察の時…。
ロザリア「お姉ちゃん、あっちに遊べそうなところがあるよ！」
シークット「本当？」

シー母「気をつけてね。」

うん…確か妹とそこで遊んだとき…。
遊びつかれて、変な切り株みたいなところに座ったのよ。

シークット「疲れた～…。」
その時だった。突然変な映像がみえた。
さっき見た時の歯車の模写。それにそっくりな、
歯車の映像が数秒見えた…。
いつもだった。何回やっても、その切り株の所に座ると。
その映像が見える。何かを訴えるのかのように。

それが怖くてそこへと行くのを私は辞めた…。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

シークット「森……。」
リーフ「どうした？まさか見たことでもあるのか？」

シークット「ううん……？ただ、」
リーフ「ただ？」

シークット「夢…？白昼夢…？なのかな…？それで見たのよ…。」
リーフ「……！（まさか？）」
なにか、資料をめくり始めた。そして、ページを開いたまま渡された。
シークット「…時の、叫び？」
ページにはそう書いてあった。

症例は、
時の歯車と関係するものと触れると発動。
電流が走るような頭痛の後、時の歯車に関する映像などが流れる。

原因は不明。
ある一種は星の停止と関わりがあると述べている。
しかし、ディアルガ反逆罪の可能性もあり、この研究は
停止されている…。
因みに、時の叫びを持つ人は稀であり、条件はないが、ランダムで
ある…

シークット「この記事が…どうしたの？」
リーフ「オマエが時の叫びを持っている可能性があるということだ。
」
シークット「…でも、それ以来切り株には触れてないよ…？」
リーフ「それはオマエが再度それに触れてみて確かめるしかないな。
」

リーフ「…で、その切り株はどこにある？」
シークット「…この森。」
場所はあやふやだが大体の場所は覚えていた。
森の…奥の…奥。
そこに、原っぱがあった。
時は止まっていて、風などないが、なんとなく、
時さえ動いていればとても綺麗なところなのだろう。
そこの少し茂みに入ったところに、それはあった。

とても大きな木の切り株。樹齢何年だったのだろう…。
リーフ「遠いか？」シークット「確か。」

シークット「いつ行くの？」
リーフ「明日でいいだろう。」シークット「了解。」
久々にそこへと行くのだろう。
……自分は、何故そんなことを言ってしまったのだろうか？

そう、そんな事言わなきゃよかった。
気づけばよかった。何かの影を。

＊「……キキッ。」
ヤミラミが、姿を捉えて、ヤミへと消えて行った。

つづく？

過去回想（後書き）

中途半端ですね…；
絶賛スランプ中です…；
また次回で会えるとうれしいですね。では、

出発。（前書き）

最近タイトルが全く思いつかないです；
スランプ…、恐ろしい子…！

出発。

次の日、目的地へと向かう前に、少しだけ家へと寄った。

シークット「…リビングは入れないから…。」
リーフ「……そうだな。」

家は、その日のまま、何も変わってなかった。
何年ぶりに帰ってきた、という感じがした。
……駄目。思い出しちゃ駄目。

リーフ「本当に大丈夫かオマエ…。」
シークット「…大丈夫！よし、私の部屋部屋…。」

まぁ、本当は大丈夫なワケがない。
でもなんとなく。
本当に駄目な時に大丈夫、と言いたくなるように。
シークット「（頼ってられないよ…。）」

自分の部屋。
見慣れた部屋。

…あー…。こことも おさらばかなと思うと、
ちょっと涙ものだなぁ…泣かないけれど。

シークット「とりあえず私は必需品とお金とるか。」
リーフ「…どうやら、この暗殺ももみ消されたようだな…。」

シークット「…そう…みたいね。」

どうやら、本当にそのようだ。
…そうなると、死体は…？

用意を終えて、一回へと降りてみた。
リビングのドア。
あの時と同じ。

リーフ「おい！大丈夫かよ！」
シークット「…忘れ物しちゃった、ちょっと待ってて。」

ガチャと、ドアが開いた。
変わっていたことは、死体と、血のあとが、無い。

シークット「……（やっぱりもみ消されたのかな…？）」
…。床がえぐれている部分がある。
多分、あの大鎌だろうか。

そっと撫でながら少し妹に向かって心の中で言った。
シークット「（私少し期待していたのにな。私を殺してくれるかも…ってさ。

今度会ったら、もう敵だね。ばいばい。）」

妹を思い出してるうちに、少し昔のことを思い出した。
他の人から見たら、偉い子、だったそうだ。この私が。
周りの子供から見たら、変な子、だったそうだ。この私が。

いつからだろう。泣かなくなったのは。
いつか、いつかの日に枯れてしまうほどの涙の果てに。
誰かの言葉があった様な、私の言葉があった様な？

シークット「（何考えてるの、馬鹿ね…。）」
リーフ「持ってきたか？」

シークット「うん。ほい。」
リーフ「？」シークット「ローブ。」

シークット「見られちゃったら大変でしょ？今は
早朝だから平気だけど。」

リーフ「あぁ、そうだな。」

シークット「よし、私も着るか。」
ローブを羽織って外にでた。

リーフ「そういえばその切り株はト何処にあるんだ？」
シークット「奥のほう。」
リーフ「……はぁ（ため息）」

シークット「場所あまり覚えてないって言ったじゃない。」
リーフ「そうだな…。」
シークット「まぁ感覚で分かるって！」

いざ、森へ。

つづく？

出発。（後書き）

力尽きました。
スランプ辛い…、
それでは。

森にて、時のメッセージ。（前書き）

キャラの見た目って…、需要ありますかね…？
あったらそのうち…。

森にて、時のメッセージ。

…と、いうわけで森。

シークット「♪～♪～。」

リーフ「……キメラとかは大丈夫なのか？」

シークット「住んでる所知ってるから大丈夫。」

一見、ここは普通の森だが、キメラがかなりすんでいて危険である。

…まぁ、シークットは長年ここらへんに住んでいるので、問題ないが。

そんなこんなで森を歩いていく。

シークット「ん？新聞。」　リーフ「ポイ捨てはよくないな…。」

拾ってみる。すると、記事には。

“一家惨殺事件、キメラの仕業か？”

と言う記事。よく読んでみると、

“＊月＊日…、＊＊＊にて、＊＊＊家一家が襲撃された。

生き残ったのは一人、次女のロザリア・＊＊＊。

殺害されたのは、主の＊＊＊・＊＊＊＊、妻の＊＊＊＊・＊＊＊

長女のシークット・＊＊＊。

この事件は近隣の森に住むキメラの仕業ではないか、と

ヨノーレ氏は話している…”

シークット「やぁねぇ…、私死んでる人扱いじゃない…、せめて
行方不明か良かった…。」
リーフ「まぁそっちの方が都合がいいだろ。」
シークット「そうね…。いざとなったら幽霊発言すればいいし…。」
リーフ「それもそれで怖ぇな…。（青ざめる）」
シークット「…？まさか、幽霊苦手？？？」
リーフ「馬鹿、オレは現実主義なだけだッ！！！」
シークット「はいはい…（笑）。」
数時間程歩いた。結果。
シークット「……（足が…足が…。）」
長い間、お嬢様生活の為か、足がもう限界に近いようだ。
一方は、余裕の表情で歩いている。
シークット「（これが年齢と性別の体力の差かなぁ…、
私もまだまだね…；）」
それでも気力で歩き続けるシークット。
シークット「（足痛い…。）」
少し足を引きずり始めた。
すると、リーフが前を向いたまま、
リーフ「少し休憩するか。」と、言った。
シークット「了解！」

…と、言うわけで休憩をしている。
シークット「う～ん…多分あと少しかな…？（モグモグ）」
リーフ「そうか…、で、それどこから持ってきた。」

シークット「家☆、はい、リーフの分。」
リーフ「あ…あぁ。（コイツ本当にお嬢様だったのか…？）」

シークット「切り株は多分もう少しで見えそうなんだけどねぇ…」
リーフ「（多分…なぁ…。）」

なんとなく、和やかなムードだ。
そんなムードを壊す空気を読まない奴が居なければ、
平和に終わっただろう。

ガサッ…、と微かな音がした。
リーフ「おい、気をつけろ。何か居る。」
シークット「…？…キメラは、居ない筈だけど…。」

しかし、一向に何も現れない。
リーフ「……急ごう。」
シークット「……うん。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

つづく？

森にて、時のメッセージ。（後書き）

ガサッの正体はなんでしょうね？
てか私メタ発言多い（笑）
また次回…

☆ちょっとした設定

シークット「えーと、今回は、キャラの人間関係図（未来編じゃないほう）
をやりたいと思います。」
最近投稿全くしてません、すみませんｏｒｚなんせめんｄ（殴。
…スランプなんです。きっと。

まぁ、そんな雑談は置いておいてちゃっちゃと済ましちゃいましょう。
まず、現時点でのキャラクター達の関係をさらっと言ってきます。

えーと、まずはギルド内において。
会話にて説明します。単に書くのめんｄ（殴。

シークット「…というわけで。」
チャマー「ギルド内の人間関係をただ喋ってくよ。」

シークット「まずは私とチャマー、トキタンズの二人について。」

風「普通に仲がいいですよね。まさかデｋ（ｒｙ。」強制終了
残念（？）ですがチャマーと主人公が結ばれるのは難しいと
考えたほうがいいかもです。

チャマー「次は、風、キマリアについて。」
シークット「腐れ縁みたいなものなんだって。
風のほうが後輩らしいね。」

シークット「次は、バルーンとラープについて。」
チャマー「あの二人いつから一緒なんだろうね。」

シークット「さぁ？」
チャマー「とりあえずすごく仲がいいって、いうか、うん。」
シークット「漫才コンビみたいになってるよね…。」
チャマー「バルーンのボケが酷いからね…相当なツッコミ《ラープ》が必要なんだよ、きっと。」

チャマー「次は、グレール、ヘイニー、ドガール。」
シークット「ちょくちょく騒ぎを呼ぶよね…。」
チャマー「本当に悪ｙ…いい仲だね。」

シークット「次は、私とキマリア、風について。」
チャマー「これもこれで、男子組（ヘイニー他）とよく喧嘩するよねぇ…。」
シークット「元々はキマリアとドガールの口げんかからなんだけどね。」

バルーン「役交代！次は僕達で紹介してくよ～☆」
ラープ「親方様、仕事がまだありますが。」
バルーン「そんなん気にしてると禿げちゃうよ！」
ラープ「ワタシはまだはげてないです！」

バルーン「えーと？まずは、僕とシークットについて☆」
ラープ「ボケが強すぎて手に負えなくなる。混ぜるな危険。」
バルーン「そう？普通に楽しいと思うけど？」
ラープ「こっちがたいへんなんです！」

バルーン「ぶぅ…、あ、あと追伸！
　　ベル忘れてた☆」
ラープ「全く親方様は…。」
バルーン「これは作者のほうのミスだよ！」

ベル＝ビッパです。何か足りないと思ってたら忘れてましたw

バルーン「まぁ、コレくらいでいいかな。」
ラープ「ええ。終わりでいいですね。」

とりあえず以上で説明は終了ですが、
なんか足りない気がする…w
まあいい。とりあえず分からないこととか、
なにこれwとか、誤字脱字があったら教えてください、では！

逃走と目的地へ、の二つ任務（前書き）

アニメ見逃した…；ぐすん。
…まぁいいか。ええと、これからの展開は…。
色々（笑です。では。

逃走と目的地へ、の二つ任務

…前回の件があり、今急ぎ足で向かっている。
少し、二人の間には緊張感が走っていた。

シークット「ね…ねぇ、リーフ？」
リーフ「何だ？」　シークット「さっきのって・・・？」
リーフ「もしかしたらヨノーレの手下かもしれない…。」
シークット「…ていうことは、追われてるのね…？」
リーフ「あぁ。」

軽く今の状況にパニックを起こしているシークット。

シークット「（…ロザリアも、ヨノーレ側なのよね…、もしかしたら…）」
ううん、考えちゃ駄目。と思考を閉ざそうとするも、
自分にはネガティブな思考がどんどん浮かんでくる。

シークット「（……駄目ね、今の状況を楽しまなきゃ駄目じゃない。）」

一方、追っ手側…

＊「キキー！タブンキヅカレマシタ！！」
＊「ダイジョウブ、チャントオウンダ。」
＊「モウオンナジミススルナヨ。」

＊「キー！ダイジョーブ！」

＊「キキッ！リーダーニツタエテクル！」
予想は当たり、後をつけられているようだ…。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
リーフ「チッ…まだ追ってきやがるな…。」
シークット「…折角の遠出なのに。」
リーフ「いつでも戦えるようにしとけよ。」
シークット「……うん。」
シークット「（どうしよ、戦闘とかしたこと無い…；
武器と言えば…。）」
少し、家から持ってきた道具を探ってみる…。
…ナイフに、弓に？…コンパクトだけど伸ばせるモップそして銃。
シークット「（弓…って…矢がなくちゃ駄目じゃない！
銃は…なるべく使いたくないな…。）」
空は相変わらず暗くて、森も相変わらず暗い。
…当然、こんな世界、見飽きた。
一応暮らしてはゆける、けれども、だけども。
私は…
死ぬまでこんな所で暮らすのは御免だ。
時が動いていたころの世界は、なにもかも同じものはない。
…そう、聞いていた。
太陽、月。聞いたことはあるのだが、実物は見たことが無い。
シークット「（見てみたいな…。）」

そんな感傷にひたるのもつかの間。

リーフ「……あとどれくらいだ？」
シークット「…ん、この道分かる…あと少し。」

リーフ「……走るぞ。」
シークット「…ん。分かった。」
いっせいに二人は走った。
走る音が、後ろから聞こえる。
どうやら本当に追っ手がいたようだ…。

シークット「…ッ。」
少しの恐怖心を押し殺した。
そしてそれを楽しみに変換する。

リーフ「あとどれくらいだ？」
シークット「っはぁッ…え、っとこの林抜けたらすぐ！」
リーフ「ここでまくぞ、せーので止まれ。」
シークット「ん…分かった…。」
リーフ「せーーのッ！！！」

ざっ…と止まりその勢いで後ろを向く。
シークット「…来る！！！」
リーフ「迎えうつぞ！」　シークット「ら、らじゃ！」

シークット「（弓…、ん！木の棒！結構尖ってるね、よし…）」
＊「キキーー！！」

狙いを定める。
シークット「（大丈夫…これでもアーチェリー少しはやったから…。

）」
ヒュッ…と矢を放つ。
シークット「…当たったのはいいけれどあまりダメージは受けてないわね…。」

＊「キーー！」
ヤミラミ、というポケモンだろう。
それが…四匹。
リーフ「おい、大丈夫か？」
シークット「一人二匹？」
リーフ「…そうなるが…戦えるのか？オマエ。」

シークット「期待はしないほうがいいかも。」
リーフ「ん、そうだ。時空のブローチを使ってみろ。」
シークット「そうか、その手があった！」

ブローチを隠していた手袋のようなものをはずした。
シークット「…力を貸して…！」
ふわっ、とブローチが光ったかと思うと、
色が、変わった。

しかし。
シークット「（何コレ…。）」
あんたが力を貸してって言ったんでしょ？
兎に角、体借りるよ。
シークット「（やめッ…！！！！）」

仕方ないなぁ…まあ最初あたりだし？
半分ってことで。
シークット「（……分かった…。）」

心の中での何かとの会話。

どうやらこの時空のブローチの、属性というのは。
その属性を象徴するなにかが封印されていて、
使い主の体を借りて戦う、という感じのようだ。

ゆっくりと目を見開いた。
シークット「（…、で？）」
愛想悪ィなぁ。とりあえず。
あんたの意識は体から追い出さないけど、
身体はあたしが使うから。
暫くだまってな。
シークット「（は、はい。）」
…って言うと思った？
シークット「（！！！）」

一瞬で、意識を失った。

暫くして……、
リーフ「おい！シークット！大丈夫か！？」
シークット「…ん…ぅ？敵は？」

リーフ「何言ってるんだ？全部倒したぞ？」
シークット「…え？」
それで話を聞くと…
私は普通に戦っていたようだ。
そして、全て倒した後意識を失って今に至る…らしい。

シークット「……ん。ごめん、さっさと行こう。」

リーフ「オマエ、体大丈夫なのかよ！」
シークット「平気平気！さ、行こう？」
リーフ「…あぁ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新しい持ち主のほうはどうだった？
…愛想悪ィ。
ははっ全くあなたそれしか言いませんよね。
折角久々の持ち主なんですし…、
でも持ち主にしては小さくねぇか？

…ええ、彼女が耐え切れるかどうかが不安ね。
こっちぁスペックが大きくてあっちに負担がかかる…
ふん、どーってこたぁないよ。
俺らが選んだんだからへーきだっつうの！
そうですね、選んだものにケチをつけてはいけませんね…。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして…

シークット×リーフ「着いた…。」
リーフ「これがその切り株（？）か？」
シークット「うん。」

リーフ「触れるか？」
シークット「……大丈夫！」
笑っていたが、内心は少し怖い。
そっと、手を伸ばして……

シークット「…ッ！！！」

つづく？

逃走と目的地へ、の二つ任務（後書き）

中途半端なところで終わりましたね…；
時空のブローチについてはまた後々に説明します。
（需要があったら）
では。

ときのさけび。（前書き）

やっとここまで着ました…
でも実はまだまだ…；

ときのさけび。

少しの電流が走ったように、頭痛が走った。後
時の歯車であろうものの、映像が現れた。
シークット「（…同じ……！）」

……ザ…ザザッ……
シークット「！？（ノイズ？）」
数年前に見たときはノイズなどなく、無音だった。
…ザ…旅人ヨ……我ヲ……アルガヲ……ザ…ケテ……

シークット「（…？私達が？貴方と、アルガ…？を…？え？）」

＝＝＝プツン＝＝＝

シークット「…ッッ！！！？」
リーフ「何か見えたか？」

少し心配そうに聞く。
こくり、と頷くシークット。

シークット「……時の、歯車が。」
リーフ「…そうか。」
シークット「っていうことは、」
リーフ「あぁ。オマエはときのさけびを持っている。」

シークット「…そっか。」
少し、笑って見せた。

だけれど、その時君の目には少し心が分かっちゃった…かな？
＊「そうですか、ときのさけび…ふむ、神秘ですな。」

シークット「……誰ッ！？」
リーフ「…ッ！？」
そして次に瞳に映ったものは。

ヨノーレ。そして、一匹のヤミラミ。
シークット「……ぁ…！」
リーフ「…チッ…。」

不適に笑ってみせたヨノーレ。
横を見てみる。
とても、憎いような者を見る目をしていた。

ヨノーレ「これはこれは、すっかり死んでると思ったのだが。
　生きていたなど心外ですな、シークットさん。」

シークット「…名前呼ばれる度苛々してくるんです。
　呼ばないでくれますか。」
ヨノーレ「はっはっは。私も嫌われた物だな。」
…どうする？この状況…。
少し目を閉じて考えてみた。

この人の実力は知らない。
…知りたくも無い。
実際昔から嫌いだった。もう隠す必要なんて無い。
…なんだ、私結構自由になれたんじゃない。

リーフ「何でここに居るんだよ…。」
いかにもすごく怪訝そうな顔で少し呟いているリーフ。
シークット「…どうする？」
リーフ「一応すぐ戦闘できるようにしておけよ…。」
シークット「…うん。」

シークット「（あまり、時空のブローチは使いたくないな…。）」
心の中でちょっと覚悟を決めた。

ヨノーレ「指名手配者と一緒に居ると言うわけは貴女も裏切りですね？」
シークット「…そうなるんじゃないんですか？」
ヨノーレ「今ならまだ選べますよ？ここで死ぬか、それとも…。」
シークット「それとも？」

少し不気味に笑いシークットの隣の人物、つまりはリーフを指差し、
ヨノーレ「そいつを殺して自由の身になるか。」

リーフ「…。」
勿論、死ぬのは御免だ。でもリーフを殺すなんて真似、もっと御免だ。
でも、二択と決まったわけではない。
シークット「…はぁ、私はパートナーを殺すなんて真似、
絶対したくはないですね、かといって、
貴方に殺されるのも御免です。もう一つの選択肢にしますよ。」

ヨノーレ「…もう一つ？」
シークット「ええ。貴方方を倒して生き延びる。」

真っ直ぐ見て言った。
勿論、勝算なんてものは無い。
ただこの人たちの目をくらまして、逃げれるだけで十分だ。

リーフ「オマエ…大胆な発言だな…。」
シークット「……目くらましでもして、逃げれれば十分よ。」

リーフ「そっちはヤミラミを頼む。」
シークット「了解。」

一斉に動き出して、戦闘は始まった。
シークット「（もうこれでいいや！）」
取り出したのは、伸びるモップ。
限界まで伸ばせば結構伸びる。
シークット「私の身長以上ね…ちょっとへこむ…。」

ヤミラミ「キキーーーー！！」
あっちはポケモンだ、早いけれど
そのぶん計算とか作戦は立てられないし、
学習能力なんて無い。

だが、モップ一本でもつかが心配だ…。
この森を上手く活用すれば…。

シークット「……！！（閃いた！キメラの住処よ…！）」
と、考えを直ぐ実行へと移した。
Uターンして、走る。
シークット「鬼さんこちらあーーーー！！！」
ヤミラミ「キキー！」

走って行った後。
ヨノーレ「おや？どっか行ってしまいましたね。
　　まさか逃げるとかはありませんよね？」
リーフ「アイツはアイツなりに考えている。」
ヨノーレ「さぁ、戦いましょうか？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
シークット「…っはぁ…はぁっ…！」
ここから一番近いキメラの住処…、もうすぐの茂みを越えたところね…。
しかし、体力無いな…私。体力つけておくべきだった…。

全力で走っている。
後ろからはヤミラミ。
ここからヤミラミをキメラの住処に叩き込んで、
キメラに倒してもらおう、という作戦だ。

シークット「…！（その茂みの向こうね、よし…。）」
すこしスピードを緩める。
ヤミラミは弱ったのと考え、スピードを速めた。

もう少し、ギリギリまでヤミラミをひきつけた。
そして、
シークット「（捕まる！…よし、今だ！！）」

ザザッ、と横によけた。
当然、直ぐに止まることなど出来ない。
そして、モップで、野球、というスポーツのように
ヤミラミを思いっきり飛ばした。

シークット「とあああああぁ！！！！」
ヤミラミは、茂みの向こうへと消えて行った。その後、悲鳴が聞こえた。

シークット「標的クリア！よし！！」
なんだ私、一人でも倒せるじゃない、と少し喜んだ後、
シークット「…、リーフ、大丈夫かな…。」
と、もとの場所へと走って行った…。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

つづく？

ときのさけび。下（前書き）

とりあえずリーフとヨノーレの戦闘も書いたほうが
良いかなと、と言いますか、なんか中途半端だったので…。

ときのさけび。下

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ヨノーレ「相変わらず強いですな。」

リーフ「…ッ……。」

戦闘経歴からして、圧倒的にヨノーレの方が勝っていた。

どんどん戦闘が困難になっていく。

ヨノーレ「遅いですね、もしかしたら彼女、本当に逃げたのでは？」

リーフ「るせぇ！黙れ！」

ヨノーレ「おや、まだ怒鳴るくらいの気力があったのですか。」

まぁ、そう思うのも当然だろう。

リーフ「………。」

ヨノーレ「さて、と。言い残す事はありますか？」

リーフ「…必要ない。まだ…負けてねぇ…！」

刃が、ぶつかり合った。

だが、やはり、実力の差だろうか、

腹の辺りを切りつけられる。

リーフ「…ッッ…くっ…！」

ヨノーレ「そうでした、生け捕りにしろと言われてたんですよ確か。

公開処刑でしょうね、楽しみですな。」

…と言いながら、動けなくなったリーフへ近づいていく。

その時、パァン、という鈍い銃声が三回ほど響いた。

ヨノーレ「ぐっ…！…貴様…！」
シークット「…はぁッ…はあッ…。」
間一髪、シークットが自分の判断で家から持ってきていた銃を使ったのだ。

シークット「今度は、頭を狙いますよ。」
普段の彼女からは想像も出来ない。
殺気だった声。目、不陰気。

ヨノーレはどうやら、腕や腹を撃たれた様だった。
ヨノーレ「チッ…まぁいい。今日の所はここら辺で。」
と、言い残すと消えて行った。

シークット「リーフ！！」
叫びながら駆け寄った。…幸いそこまで傷は深くは無かった。
今なら魔術つかえる…。

リーフ「ヤミラミは倒せたのか？」
シークット「しゃ、喋らないで！あとちょっと我慢してて。」
とりあえず魔術で出来るところまで傷の修復しておかないと…。

傷口付近に手を置いた。そして、
シークット「（傷を癒して…！！）」
ぽう、と魔術独特の光が傷を癒した。
暫く、傷は完全にはふさがらなかったが、応急処置は終了した。

リーフ「倒せたのか？」
シークット「キメラの住処にちょっと出かけてもらった。」
リーフ「…（住処を知ってるからこそできる戦法だな…。）」

とりあえずまだ立ち上がらないで、と促すシークット。
リーフ「その銃…どうしたんだ？」
シークット「おうちから拝借してきたの。弾も結構あるし。」
まだ何丁かあるしね…、と話を続けた。その後に、
シークット「ごめんね、私まだ弱くて。」

申し訳なさそうに、目を伏せながら言う。
シークットの目線からは見えなかったが、リーフは微妙に笑ったあと、
リーフ「気にするなよ、それ位。」
と、頭を撫でた。そして数秒後に自分のやった事に恥ずかしさが芽生えた。
な…、何やってんだ俺ぇ！！！！！

リーフ「……！！す、すまん／／／／！」
ふい、と顔を背けたリーフ。
一方のシークットは少し唖然とした後に、
シークット「頭撫でられたの初めて…！」
と嬉しそうなコメントを述べた。

実質、初めてではないが、眠っているときのことなど覚えてはいないだろう。

リーフ「かっか…帰るぞ。」
まだ結構動揺していたようだ。
シークット「…うん！」

果たして、この止まった世界はいつになったら動き出すのか。
どうやったら動き出すのか…？

ヨノーレ「……申し訳ありませんでした。＊＊＊様。」
ここじゃない、どこかで、誰かが誰かに謝っていた。

つづく？

ときのさけび。下（後書き）

一日で何回も更新をするのは結構疲れますね；
軽くおーばーひーとですｗ
次回…は、なんでしょうか。
と、とりあえず次回で！では。

旅の計画。（前書き）

多分、多分もうすぐこの森ともさらばな筈！
では！

旅の計画。

また、帰ってきてリビングにて。

シークット「疲れた…。」うだー…とソファーにだいぶするシークット。

そしてそれを鼻で笑っているのかまたは呆れているかのように、見守っているリーフ。

リーフ「疲れているところ悪いが、情報の整理をしたいんだが。」

シークット「ん、分かった。」

と、椅子に腰掛けるシークット。

そして、まじめな顔になる。

シークット「私には…ときのさけびが、あるんだよね？」

リーフ「ああ。そのようだな。」

嬉しいんだか、悲しいんだか。

微妙な気持ちのシークットは今、どんなリアクションをとったら良いのか考えている。

リーフ「そのことなんだが…、あると分かった以上、
　くれぐれも、知られないようにしてくれ。」

シークット「…なにか、あるの？」

リーフ「あぁ、今となれば時となにか関係がある。
　世間に知られれば闇の帝王（ディアルガ）に狙われるかもしれない。」

そうか…と、小さく返すシークット。

更に付け加える。

リーフ「あと…それ、時空のブローチは隠したほうが良い。」
シークット「同じような理由だよね？」
リーフ「あぁ。」
ちょっと、重い空気…。
シークット「（な、何とかしたほうがいいよね？そうだ！）」

いきなり家から拝借してきたバックの中から、
手袋のようなものを取り出した。
シークット「ふふ～！やぁっと使うときが来た！」
リーフ「？なんだそれは？」

それは手袋のようなものだが、
指先だけが切ってあるものだ。
シークット「ほら、これで隠れる。アームウォーマーとかいうのを
ちょっと改造したの。」
リーフ「なかなか良い出来だな。」
シークット「あ、そうそう。色々言い忘れてたけれど、
家から拝借してきたものを紹介するね。」

…と、ばっくがら様々な物を取り出していく。

シークット「お金と、食料と、食料と、食料と、食料と、お菓子、お菓子、
お菓子
お菓子、お菓子、ん、あとローブとかの身を隠す品々
…。
それと、携帯電話。コレ必須、あーとーは…。」
リーフ「ちょっと待て、お菓子と食料多くないか？」
シークット「…職食属〔しょくしょくしょく〕があれば人は生きて
いけるのよ。」

リーフ「ちょっとまて、それオマエにとっては
食食食だろ。」
シークット「ばれた？漢字は変えたんだけどな…。」
リーフ「…はぁ、まあいい。」
シークット「…ん、そうだった。
今までの、本題じゃないよね？」
リーフ「…！？」
コイツ、読心術でも使えるのかと疑うリーフ。
シークット「本題…、について、教えてくれると嬉しいな。」
リーフ「そのことについてなんだが…。」
ごくり…と、そんなかんじのムードが漂う。
リーフ「……すまねぇ。忘れた。」
ガターン！椅子ごと目の前にいたシークットがこけたのがよくわかった。
シークット「うん、そうか。」
リーフ「すまねぇな、思い出したら話す。」
シークット「分かった。じゃあ私はもうそろそろ寝るね。」
リーフ「あぁ。」と、生返事を返して資料にめをやった。
シークット「？夜更かし？」
リーフ「ちょっと…な、先に寝ていてくれ。」
シークット「うん、おやすみ。目わるくしちゃだめだよ？」
リーフ「わーってる。」

…静かにドアが閉まった。
ほっ、とため息が零れた。まだ、アイツに話すのは駄目だな。
重すぎる。と考えた後、電話でどこかへと電話をかけた。

リーフ「もしもし？リーフだが。＊＊＊か？」
＊「ぬ？あ、リーフ？どうしたん？やっぱ＊＊＊＊居なくて寂しい？え？」
リーフ「んなわけねぇ！！！！」
＊「はーっは、んなどならんでええやんかぁw」

はぁ、とため息をついたあと、話へと入る。
リーフ「手がかりを見つけた。近々そちらへ向かう。
　…それまでにあることについての情報を集めてほしいんだが。」
＊「…！！！！手がかりやと？
　どんなんや、＊＊＊＊手伝ったるわ。」
リーフ「…時空のブローチとじくうのさけびだ。」

＊「おまえ…！！」
来る、と少し受話器を耳からかなしたリーフ。
＊「ほんまでかしたやん！！二つも！そいつなんて言うん！？」
受話器から、
「うっさいわ！！！」と、言う声と、「すまんな～」という声が聞こえた。

リーフ「まだ小さい子供だ。」
＊「女の子？女の子なん！？」
リーフ「黙れロリコン。女だ、二つとも持っている。」

＊「りょ…両方…すっごい子やんなぁ…。」
リーフ「そいつも連れて行くが、くれぐれも…。」

＊「？」
リーフ「手ェ出すなよ？分かったな兄貴。」
多分その殺気は受話器を通した先でも分かっただろう。
兄「んな言わなくてもわかっとるよ！」
リーフ「オマエの場合なにかしらしかねないからな。」

兄「あー！兄ちゃんに向かってお前言うたな！？お兄ちゃん泣いてまう！！」
リーフ「勝手に泣いてろ。あと、情報のこと、頼んだぞ？」
あ、無視！？無視！？といいながらも、
兄「任しとき！兄ちゃん張り切るわ！」と、了解してくれた。
リーフ「じゃあな。」兄「さいなら～。」

ピッと、電話を切った。
リーフ「無事にあっちまで行ければ良いんだがな…。」

その頃、シークットは…。
シークット「（やーっぱ、隠し事してるわよ…。）」
寝付けないままでいた。
元々寝つきが悪く、酷いときは一睡も出来ない。
シークット「（…仕方ないか。私だって、色々…。）」

シークット「……いいや、寝よう。」
毛布を、深くかぶった。
“いつか、もしも、もしもだけど。

どうか私を光のあふれる世界に連れて行って下さい。”

“貰った愛が全てを創るわけじゃない。

偽りの優しさなんかは要らないよ？”

――私の望んだ未来（あした）はきっと、そこにある筈だから

そこに全て在る訳じゃないのは知っているけれど、まだ見たことの無い

世界に希望を持っていたい、それだけ――

私はまだ知らなかったんだ。その先には代償があったことを。

つづく？

旅の計画。（後書き）

えーと、何で関西弁なのかは、私も良く分かｒ（殴。
とりあえず、後ほど色々と分かってくるはずです！では！

驚愕（前書き）

どうも、ネタ切れました。
シークット「シリアルを減らせばいいのよ。」
やぁ主人公ちゃん、残念だけどそれは出来ないんですよ。

一応タグにグロ注意って…ね？

どうでもいいですねはい。では！

驚愕

時は、夜という時間。
昼とも朝とも変わりはしないが、時計によれば夜らしい。

ある、山奥の集落が焼けていた。
その中央にたたずむのは、
フードの男と、同じくフードをかぶった少女だ。

「たったすけてくれぇ！！」

その男の願いも虚しく、大鎌を振りかぶった。
メチャ、といとも簡単に男の頭の骨は砕け脳みそまで達した。

もうそれっきり、男は喋らなくなった。
ピクピク…と痙攣したまま。

周りを見渡してみる。
血、血、血、いや、あれは内臓か。

＊「……ヨノーレ、何故、殺す必要があった？」
ヨノーレ「それは、“反逆者達”だからでしょう？」

グチャッ、と内臓を踏んだ。
ここまで悲惨な状況だと、もう何も感じなくなる。

……本当に、これで良かったの。
私にはこれしかない。
……私ガ、正義ナンダ…！

周りの屍達は、そんな私を嘲笑っていた。
何故なら、まだ生存者は残っていた。

＊「じい…ばあ…。」
少女は、山奥へと逃げていた。
＊「仇を…とりたい…！！」
小さな決心をした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

シークット「む…ぅ…。」
起きた。と、布団をガバッとまくった。

そうすると、いつもは既に起きているはずのリーフがいた。

シークット「（あ、起こしちゃうかな？）」
そっと、立ち上がった。

シークット「（よし、無事に起きた！）」
初めてこの人の寝顔見たな…などと思いながら、
朝食を作りに台所へと向かった。

シークット「昨日よっぽど夜更かししたのね…、
…？何だろ、この紙。」
テーブルの上にあった一枚の紙。

シークット「（…？時空のブローチ、じくうのさけび…、
ん？電話番号？……兄貴！？
お兄ちゃんいたんだ…。）」

起きていないことを耳を澄まして確認すると、
横の書類を読み始めた。

シークット「……ッ！？まさかとは思っていたけれど…。」
そして次の一文も、シークットの精神にダメージを負わせるのには
十分だった。

フラッシュバック、
夜、悲鳴、リビング、扉、血、頭、お父さん、
お母さん…、死、異体、遺体、痛い…！！！
頭に走る頭痛と一緒に蘇って来る、少し前の出来事。

シークット「ぅ（叫んじゃ駄目…！こんな弱いところなんて見せちゃ駄目
だよ…、こんな弱いのに…、これ以上迷惑かけられないよ…。）」
自分でも足が震えているのが分かる。
身体も、なぜこんなに震えるのかが分からなかった…。

シークット「…ちょ、朝食作らなくちゃ。」
忘れろ、忘れるんだ私。
そんな事なかった。それは私ではない。違う違う…。

そして、資料を元の場所に戻し、
台所へ戻ろうとしたときに、気がつけば私の身体は、
ななめっていて、そして目の前に床が…、
ガスン！！と、目が覚めるような一発。

と、その音で目が覚めるリーフ。
リーフ「……ぁ？何だ？朝から…。」
起きようとして異変に気づいた。
いつもまだ寝ている筈のシークットが居ない。

シークット「いっつぅ……。」

リーフ「な、何があった！？」
と、随分と朝から騒がしくドアが開いた。

シークット「いや…朝食作ろうとしたら、
転んじゃって…。」
リーフ「そうか…。（良かった…。）」

少しほっとするリーフ。
シークット「昨日そんなに夜更かししていたの？」
リーフ「少し気になることがあってな…。」

と少しやつれたように返したリーフ。
シークット「よし、じゃあ今日はそんなリーフ君の為に、
シークットさん朝食作っちゃうよー！」

リーフ「…（不安だ…。）」

その心配とは裏腹に着々と料理を進めるシークット。
シークット「♪～～♪♪～～。」

暫くして、出来たようだ。
シークット「えーと、ちょっと時間節約してたから

分からないけれど一応、……よいしょ。」

リーフ「なかなか凄いじゃないか。」
シークット「それ程でもないよー…。」

朝食の後の片付け…。
その時、少し呟いた。

ごめんね。という言葉は
彼に届いただろうか？

多分、その呟きは聞こえなかっただろう。
だが、何かを言った、というだけは分かっただろう…。

彼もまた、彼女もまた、罪悪感に駆られていて、
彼も彼女もまた、同じような傷を負って、

互いにどこか、どこかが自分と似ている。と言う事が、
互いの信頼を生み出しているのだろうか…？

じくうのさけびも、信頼できる人間がそばにいないと発動しない。
さて、この二人はどこまで世界を変えられる…？

つづくのか？

驚愕（後書き）

あれ？シリアスなの？違うの？よく分からない…。
まあいいか、では！

Not titol（前書き）

あ、タイトルですか？
その言葉の通りに、タイトルが思いつかなかっただｋ（殴。
はい。ごめんなさい。では！！

Not titol

皿洗いもひと段落した、
暫くして、リーフに呼ばれた。

リーフ「近々なんだが、ココを出ようと思う。」

もうそれは朝の時点で知っている。が、見たことを悟られないように、

シークット「……？どうして？」

と、質問を投げかけた。
すると、リーフは地図を取り出してきた。

リーフ「…手がかりが見つかったんだ。
　それに、ココももう危ないだろう。」

シークット「…そっか…。バレちゃったの？」
リーフ「分からない。完全に、とでもないが、
　可能性は高い…、アイツらの事だ。いつ奇襲をかけられるか分からない。」

茶菓子のクッキーを一口食べてから、
シークット「…襲ってくる前に逃げちゃおう、みたいな感じなのね？」
と、言い、紅茶を一口飲んだ。

そしてリーフは地図で説明を始めた。
森の真ん中あたりを指差して、
ここが今の場所だ、というと、かなり離れた山のふもとへと指を滑らせ、
ここが今回向かう場所だ、と教えてくれた。

シークット「ほうほう…、それで、どんな手がかりが？」
リーフ「手がかりというか、そこに暫く邪魔になる。」
分かりきっているが、聞いてみる。
シークット「？知り合いでもいるの？」
すこし、頭に手をやってからリーフは
リーフ「知り合いもなにも、兄弟が居る。」
と、困ったような顔をしていった。
シークット「ほぉ、協力者なんだね？」
リーフ「あぁ。」
茶菓子も残りが少なくなってきた。

リーフ「少し長い旅になるだろうからちゃんと準備しないとな。」
シークット「そうね。少し長いって、どれ位かかるの？」
と、最後の茶菓子を食べた後に聞いてみる。
リーフ「…早くて五日…、しかし…オマエがいるから…。」
シークット「足手纏いみたいに言ったね。」
　きゅー…、と少し恨めしそうににらんだシークット。

リーフ「すまん、そういう意味で言ったんじゃなかったのだが。
　とりあえず多めに見て十日ほど…か？」
シークット「わぁ、結構かかるのね…。」

リーフ「いや、オマエの場合、睡眠とかなり休憩を要するからな。
　それに歩くペースも…あと、途中で襲撃食らうかもしれねぇし…。」
シークット「……わー…なんか…ごめん。」
少し、だが自分の幼さと貧弱さを呪った。

リーフ「別に、そこまで急いで行く訳じゃねぇし…。」
シークット「なんか…ありがとうね。」

強くなろう…と、心に決めたシークットだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

森の中、否ここは、山、だろうか。
止まった滝の裏にある洞窟…。

色とりどりの宝石。だが、時が停止しているため、灰色にしか見えない。
その中に、少女が一人。

＊「……もう少し。」

何かを待っているようだった…。

つづく…？のか？

Not titol（後書き）

短い。短いよ私！
ごめんなさい、なんか色々と酷いです、はい。
少女ちゃんは未来の世界ではおなじみのあの子です。
はいネタバレ乙ですね、ごめんなさい…。
では！

機械的過ぎる都（前書き）

実は別人目線…；
こんかいは主人公の話はでますが
主人公は多分出ないです。では！

機械的過ぎる都

…止まった世界にて、私は…私、は。

もう、闇に心を飲み込まれてしまっているのだろうか。
ある、全てが人工の都市にて私は働いている。

何故か、と聞かれると表向きはこの星のため。
本当は娘の命のため。

コンコン、とノックの後、返事をするまもなく開けられる扉。

＊「…あー、君か。」

カタカタとキーボードを打ちながら問う。

＊「上司の名前くらい覚えてほしいですな。」

ったく、忙しいのに…と思いながら、
回る椅子を回して後ろの人物を見た。

＊「ヨノーレ、と何？あれ、新入りさん？」

ええ、とヨノーレは頷くと、その後ろの人に
自己紹介を促した。

＊「…ロザリア。」
ぶっきらぼうにそう言うとそっぽをむいた。
一応自分も名乗った。

＊「私はテイラ。宜しくね、ロザリア。」
そのロザリアという少女と挨拶を交わした後、
ヨノーレに目をやった。

テイラ「包帯まいてるけど、負けたの？」

ヨノーレ「失敬ですね、戦略的撤退ですよ。」

…、この人に怪我を負わせるなんて…。
中々ね、と思いながら話を続けた。

テイラ「んで？何しにきたの？私結構忙しいんだけど。」

手にあるボールペンをくるくると弄り、椅子に座ったまま話す。

ヨノーレ「あぁ、ロザリア、研究室の書類を持ってきてくださいね。」

ロザリア「……。」

無言のまま、ロザリアという少女は出て行った。

テイラ「…例の試薬のこと？まだ未完成よ。実験はまだ早いわ。」
と、机から持ってきた書類を持ち指でピン、とはじいた。

ヨノーレ「十分ですよ。強すぎるほうがむしろ良いですからね。」
怪しく笑った。それで何をしたのか悟るのは十分だった。

テイラ「…ッ！！まさか…！あの子に！？」
どうしよう、という疑問しかない。

なんせあの薬は…。まだ研究段階。何がおきるか分からない…。
それを何の罪もない少女に…。

ヨノーレ「理論的には完成してたのでしょう？」
テイラ「でもまだ実験体にも投与してないのよ！？」

勢い良く椅子から立ち上がった。そのせいか椅子はカラカラと少し回った。

ヨノーレ「むしろ感謝してくださいよ。実験体を提供したんですから。」
笑顔は壊れない。なんなんだこの人は、この人は狂ってる。
完全に闇に心を呑まれている…。
テイラ「ッ…！！！」

ヨノーレ「まぁまぁ落ち着いてください。この薬でも投与しなければ彼女は姉を超えられないのですから。」

テイラ「姉？」
そう、と説明を始めた。

ヨノーレ「彼女の願いは姉を越えること、だそうです。
その姉はときのさけびと時空のブローチ所持者なんですよ。」
テイラ「！？二つ…？」
可笑しい。流石に二つ持つと、主体への影響が大きいのでは…。

ヨノーレ「ま、あの薬でも追いつかないと思いますが。
私はその少女もこちら側に引きずりこむたけで十分ですし。」

どうやら、仲間、にするのが目的らしい。
…卑怯な手を使ってでもという思考が手に取るように分かった。

テイラ「まさかその傷も？」
ええ、と答えた後、付け加えた。
ヨノーレ「何せ不意打ちでね。といいってもまだ彼女は力を操りきれていない。
お人よしですからね。」

テイラ「……ヨノーレ貴方…。」
ヨノーレ「貴女の娘さんは、元気ですよ？」
…言葉の意味は分かった。
“たてつくと今すぐにでも娘を殺す。”

テイラ「…ッ…、私仕事にもどるんで。」
椅子に座って、モニターを見た。

ヨノーレ「そうですか、頑張ってくださいね？」
そう言うと、部屋を出た。

テイラ「……ッ。」
私は…無力だ。

一方部屋を出たヨノーレはまた笑うと、一言つぶやいた。
「貴女の娘さんは本当に手がかかる、貴女のように。」
廊下を、歩いていった。

ロザリア「……。」

廊下を歩きながら、ロザリアは思っていた。
あの不思議な金髪、赤みがかった琥珀色の瞳も、
うっすらと、あの人ににた顔立ち。

ロザリア「…他人の空似…か。」
コツコツ、と靴の音が響く。

一方、ある地下室では誰かが、何かを呟いていた。
＊「彼方達はまだしらない。真実を。」
そういった後、ぽつりとテイラの名前を呼んだ。

つづく？

機械的過ぎる都（後書き）

えー…っと。ごめんなさい。
いやそのえーとそのまぁそう言うことですはい。
ではまた次回。

☆遊びパートその1※本編全く無関係※（前書き）

やりたい事をやってみました。
反省はしています、後悔は…多分してます。
なんか皆（キャラ達）で童話をパロってみました。
…ごめんなさい。あ、本編とは無関係注意です！
ついでにキャラ崩壊注意報です！あと血注意！では！
見ないほうが良いかも。ですね。

☆遊びパートその1※本編全く無関係※

シ：こんにちは。
チ：あれ？台詞のところ変わってない？
シ：ん、今回なんかこっちのほうが都合が良いんだって。今回のは。
チ：ふーん…今日は何をするの？
風：えっと、童話のパロらしいですよ～。
キ：なんかシとチだけですとシチューみたいですわねキャーーwww。
チ：なんだよう！もう！
風：だって、チャマーさんのチはチキンのチなんでしょう？
チ：違うから！！！本当に違うから！！！！
えー…そんなワケで第一舞台開幕です。

「赤ずきん」

配役…

・赤ずきん…シークット
・おばあさん…バルーン
・お母さん…リーフ
・狼…ヨノーレ
・猟師…チャマー
・ナレーター…ロザリア

シ：特に反論はないよね？じゃあS…

リ：意義あり！！
なんでオレがお母さんなんだよ！！！
バ：まぁまぁ♪そんなに起こらないでよ♪
リ：…そういうオマエもおばあさん役だぞ。

バ：ラープ♪　ラ：嫌です。
バ：ぶー…、まぁいいや♪とりあえず皆仲良くともだち、ともだち～♪
ロ：…（何で私がナレーター…。）

とりあえず収まったので、ｓ…
シ：すたーーーと！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
ロ：あ？昔々あーｒる所に？赤ずきんちゃんというねｅ…女の子がいました。あーるひ？赤ずきんちゃんは、お母さんにお使いを頼まれました。
それはそこのピンクのやｔ…おばあさんにリンゴジュースとセカイイチ…？
あ？これ原作はぶどうのジュースとかじゃないのか？
バ：だってリンゴがいいんだもん！セカイイチがいいんだもん！

全：……。
ロ：えっと、それを届けることでした。はぁ…、

リ「本当に大丈夫か？」　シ「大丈夫だ、問題ない（どや。）」
リ「…不安だ…。」　シ「やっぱ、一番良い装備を頼む。」

ロ：心配性のお母さんは赤ずきんちゃんに拳銃を持たせてお使いにださせました。

リ「寄り道するんじゃねえぞー。」
シ「おふこーーす！」

チ：ちょっと待って！いきなり物騒じゃないか！！！
ロ：…（無言の圧力）　チ：…ごめんなさい。

ロ：赤ずきんちゃんは森を歩いていると、お花畑を見つけました。赤ずきんちゃんはおばあさんが喜んでくれると思いｗｗ、花を摘むために、寄り道をしました。
すると後ろから、よｎ…狼が近づいてきました。

ヨ「これはこれは赤ずきんちゃん、何をしているんですか？」
シ「おつかいです。あとおばあさんが喜んでくれるかと思って花もつんでるんですよ。」

ヨ「そうなんですか、偉いですね…あの、拳銃向けるのｙ…。」
シ「お断りします（すまいる）。」

ロ：拳銃におそれをなした狼はばあさんの家に先回りして食べてやろうと
考えました。そして何も知らない赤ずきんはおばあさんの所へやってきました。
普通あの人が拳銃ごときに恐れをなすわけがないだろうｗ。
ヨ：まぁ、台本ですから。

シ「ｂ…おばあさーん。」

ロ：なんだか、おばあさんのふあ…飽きた。変われ。
チ：えぇ！？　ロ：…（無言の圧力。）　チ：ごめんなさい。

チ：えっと…なんだか、おばあさんの様子が変です。
見ればわかるよ。なんかかなり変だもん。

おばあさん？「わぁい、ありがとう。（棒読み）」

シ「？おばあさんどうして服が黒いの？片目隠してるの？
口調に♪ついてないの？いつものピンクファッションはどうしたの？
いつもの童顔はどこにいったの？何でそんなに顔が違うの？
整形したの？なんでフードにいつもの耳がついてないの？なn…。」

おばあさん（ヨ）「一気に質問しないでください！！！！」
チ：なんと、おばあさんは狼だったのです。
知ってるけどね。

シ「ヨノーレだーーー！」
チ：赤ずきんちゃんは持っていた拳銃で狼をころして、
中のおばあさんもすくいましたとさ、めでたしめでたし…
なんか原作と大幅に違うよね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

シ：終わった～～♪

お疲れ様でした。

ヨ：シークットさん随分と台本と違うこと言ってませんでした？
リ：確かにな、台本と合ってる台詞が一つもねぇし。

シ：実は私の台本これだったのよ。

”君なら出来る。頑張れw”

リ：台本の製作者誰だよ…。

シ：さぁ♪

チ：しかも僕の出番なかったし！

ロ：…（無言の圧力。）

チ：…何でもないです、ごめんなさい。

本当にごめんなさい&有難うございました。

ＥＮＤ

☆遊びパートその1※本編全く無関係※（後書き）

ごめんなさい×∞！
なんかやってみたかったというか、
ついカッとなってしまって…、まぁ、たまには
息抜きも必要じゃないですか！
ごめんなさい…。次からはまじめに書きます。では！！

暗い洞窟にて。（前書き）

また別人視点です！
ごめんなさい…；では！

暗い洞窟にて。

静寂な闇の中。

私はただやることも無く、寝転んでいた。

…。との静寂の中にため息が一つ零れた。

あー…、何やってんだろあたし…。

でも…探せ、って言われても。

手がかりも何にも無い中どうやって探せと言うの…。

じいが言うには、時を待て、と言っていたけれど、

この世界実際時なんて流れてない。

と、少し後ろ向き思考な、村の生き残り、レビアは

洞窟の中でずっと、何かを待っている。

彼女の住んでいた村は、伝説のポケモンと呼ばれるセレビィと

深く関わりがあった。

実際、村人の一人ひとりがセレビィの力をわずかながら持っている。

村の一族は代々、セレビィの力を継続してきた。

しかし、星の停止によってだんだんと力は弱ってきた。

そして何よりも村に大切な存在のセレビィ自体が絶滅した。

絶大な力を村長に預けて。だがやはりその力も衰退。

遂にはレビアの代で力の継続が途絶えてしまった。

それなら、王宮側には村を滅ぼしても利は無いはずなのだ。

レビア「……遺跡…ねー…。」

力は無くなった。でも、あたし達は他にも
王宮側には危機な物を持っていたんだ。

あたしは何も知らされなかったけど、
知っていたらしいんだ、時を動かす方法を。
そりゃあ、今こんなんだから通用するかは分からないけどね。
でも王宮側が刺客を送ってきたのなら話は別。
今やっと分かった、きっと本当なんだ。

じいもばあも皆も、時を動かそう、って頑張ってた。
だから殺された。
何の罪があったの？
私たちには、朝日を拝む事も、風を感じることも、夕日に思いをはせるのも
罪だったの？許されなかったこと？

レビア「…っはぁ、やめよ、やめやめ。」

じいは私を逃がすときに…こう言っていた。

「時は来る、時を動かす旅人が来る。その人達について行ってくれ。
わしらはもう歳をとってしまった。レビア、あんたはまだ若い。
……ときのさけびに、時空のブローチ、じゃ。
その保持者が時期にやってくる。…あんたは、この村の誇りだ。」

……じい、あとどれくらい待てば？
隠れ場所には誰もやってこない。

きっと皆死んでしまったんだ。

少し開いた瞳に、暗い洞窟の上が見えた。
灰色になった水晶…もともと何色なんだっけ？

いっそ皆と一緒に死んでしまおうか？
そう思ったりもしたさ。でもなんか、
どんな顔して冥界のじいとかに顔を合わせればいい？

ただじいたちの死を無意味なものにはしたくないんだよ。
あたし自体はそうは思ってないけど、本当はそう思ってるんだろうね。

遅くは無い。帰りたい。あの頃へ。
きっと来る、だからあたしは待つ。

レビア「……もう少し。」

どこかで今、誰かがつぶやいている。

＊「そう。その意思です。…時を動かすのに貴女も必要…。
　これできっと、全てが上手くいく筈。」

つづく？

暗い洞窟にて。（後書き）

…Ｏｒｚ。
ごめんなさい、セレビィポジションは
原作の性格と結構違うかもです！

残された謎は鍵となるか。（前書き）

厨二乙。

この小説は基本厨二です。では！

残された謎は鍵となるか。

真っ暗な中。
ここは…、牢獄なのだろうか。
一人、誰かがその光一つも届かない部屋で呟いていた。
＊「……時。……闇…。」
……静かだ。
時は傷を癒してくれる。
闇は傷を一時的に癒してくれる。
一番の特効薬は、死、だろう。
＊「……テイラ。」
ふと、ある女性の名前を呟いた。
扉の向こう、少しくぐもった声が聞こえた。
テイラ「……、……ごめんなさい。」
ふと強気な彼女の口から聞こえた弱い声に、
包帯の内側にある耳が、ぴくり、と動いた。
＊「……私だって同じです。」
御気になさらないで下さい。と言葉をかけた。

テイラ「出れないの？」

彼女の問いかけに、包帯だらけの青年は、
少し微笑みながら答えた。

＊「……私に、何をしろというのです。
　もう、私の役目は終わりました。」

へいたんに言葉を並べる。
機械の様に。持ち主に都合よく玩ばれる玩具の様に。

テイラ「…そう。食事は？」

＊「要りません。動いていないので。」

分かったわ、と。言った後、彼女のヒールがコツコツ、
と立てる音が聞こえた。自室に戻ったのだろう。

後悔や辛さはある。だが、
これで、良かったのだ。と、自分に言い聞かせることしか出来ないのだ。

＊「届いて下さい…。」

私には言うことが出来ない。
真実はいつでも残酷なもの。
でもきっとそれは…、必然だ。
それはどうやったら変えられる？かなんて。

一つしか分かっていない。

＊「……19q9＊19t14＊20q1117q8p20z21
＊4q」

…また俯いた。

つづく？

残された謎は鍵となるか。（後書き）

また別人視点です。
最後の意味不明なのは、まだ解かないほうがいいかもです。
では！

再び、動かすために。（前書き）

…タイトルネタが尽きてきました…。
えっと、久々に視点が戻ります。

再び、動かすために。

……朝の時間帯がやってきた。
薄暗いのは変わらない。

もう隣のリーフは起きている。
朝食でも作っているのだろう。

シークット「ここともお別れか…。」

そう、すこし、時間が過ぎて私たちの出発の時刻が来た。
そう思うと、ベットから出たくない…。
う〜〜〜…、と暫く考え。

やっぱ出よう。旅なんてしたことないし楽しそうじゃない、と
ベットから勢い良く飛び降り、失敗。

朝から膝に青たんを作る羽目になってしまった。

一方、リーフはというと、台所へと居た。
寝起きで少々ぼやける頭の中でいろいろと考えていた。
……なんか、考えていると料理が焦げ付きそうなので
いったん停止。料理に専念することにした。

静かに扉が開かれてシークットは現れた。
膝を抑えながら。

シークット「ぁいーーーーー…。」

…寝起きだからな、何したのやら、と。
少し微笑ましい彼女を見ながらどうしたんだ、と問うと
案の定朝から転んだとの応答が帰ってきた。
シークット「いやー私部屋カーペットだったから…。
　フローリングって辛いよね…いう～…。」
リーフ「怪我は大丈夫か？」
シークット「おーるおーけー！どっどんとこい…。」
はぁ…とため息をつくとリーフは湿布の位置を教えた。
シークット「いたたいたた～♪」
何故か痛いという言葉が歌になっていた。
ふう、と湿布を張り終えた。
なぜかそれだけで達成感がこみ上げた。
朝食。また何時もの様に。
…この何時もが、もうなくなっちゃうんだね…。
既に無くなっていたけど。
そして、時間の流れは速く。
出発の時刻を指す。

シークット「さよなら、第二の家…。」

少しの間過ごした隠れ家に別れを告げ私たちは旅へと出た。

リーフ「？どうした？早く行くぞ。」

何事も無かったかのように、シークットは笑った。

シークット「何でもないよ、行こう。」

星の再起動に向けて、二人は歩み始めた。

＊「…動き出した。」

一言呟く影。

つづく？

再び、動かすために。（後書き）

や…やっとおうち出発した…。
長かったです…！ｏｒｚ
では！

最初の一歩。（前書き）

と～んだ♪（（殴。
ごめんなさい。始まります。では。

最初の一歩。

ある、二人が歩いている。
先ほど旅を始めたばかりだ。

景色は、薄暗く、歪んでいて。
でもそれを誰かが「美しい」と云った。

人の感性はそれぞれともいえど。
それになれてしまってきていたらそれは…、

もう、闇に心を呑まれ始めている。

……。

ある道。木々が更に薄暗く、鬱蒼としている道というべきか困る道。

沈黙を割くように、少女が問いかけた。

シークット「最初の目的地はどこなの？」

問いかけられた青年は、地図を見ながら云った。

リーフ「ここからだと…、この森の途中で仲間の村がある。
とりあえずは最初の目的地はそこだな…。」

空気、温度、一日中、一年中、一生変わらず。
ただただ、うす寒い空気が風も無くどんよりと流れている。
回答を受け取った少女は少し、空を見上げた。
黒い木々の隙間から見えるのは、

星も、太陽も、月もない。
ただの黒。ぽっかりと、穴が開いているようにも見えた。

シークット「…頑張ろう。リーフ」

リーフ「あぁ。」

ただただ、普通の。
ごく平凡な日々を願った二人。

アナタにとって平凡は普通ですか？大切ですか？
突然壊れた平凡を、取り返す勇気がありますか？

アナタにとって…、春夏秋冬はあたりまえで、朝昼夜もあたりまえですか？

アナタにとってのあたりまえを、私は欲しているワケです。
どうか…離れた世界のアナタも。

今の幸せを抱きしめて。

つづく？

最初の一歩。（後書き）

訳わかめ。
ごめんなさい…；
ではｏｒｚ

NEXT↓↑NEXT（前書き）

…ｏｒｚまた別の人目線です。
では。

NEXT↓↑NEXT

…薄暗い部屋の中。
さっさと灯りをつけるか…。

パッ、とスイッチを押すと自分の部屋に電気がついた。
ため息をついた後に、自分の机に座った。

今日は…、あの薬の解毒剤ね…。

極秘でこのプロジェクトを進めている。
ヨノーレにも隠している。

何故かと言うと、やはりロザリアという子供に
未完成のその薬を投与させてしまった、という罪悪感から。
別に解毒じゃなくても作用そのものを打ち消せれば良い。
別にあの薬のプロセスは把握しているから、
それを応用していけば良いのみ。というだけなのだが…。

やはり何回実験をしても何かが足りないようだ…。

テイラ「駄目だったわね…。」

何が、足りなかったのだろう…。
目を閉じて、考えてみる。

あの薬の作用は……だから、中和を起こせればそれで良い。
その為に何かが足りない。

テイラ「一体何が…。」

そしてこの前あの男の居る部屋から立ち去るときに、
彼が放った言葉。
暗号文だ。一応意味は分かったが、その言葉の意味が分からない。

すると、唐突に携帯電話のメール着信音がした。
だるそうに、その携帯電話を手に取る。

テイラ「えー…ヨノーレからか…。」

受信、くそやろう
という文字が液晶画面に浮かんでいた。

…くそやろう、とはヨノーレの事だ。
液晶をタッチして内容を見た。

―色々やるべきことがあるのでこれからはここにはあまり行かない
かもしれません。
その為、私が居ない間のここの管理をお願いします。―

テイラ「…？まだ暇があるとか言ってなかったっけ？まぁいいや。」
慣れた手つきで液晶を操作し、返信をする。

―言われなくとも。私忙しいので。じゃあ。―

送信終了、という文字が浮かんだ。

……何か、起きるのだろうか…。
かなりの衝突に私はまだ身固めも、何もしていなかった。
これから、何が起きるのだろう。
ただただ、それだけだった。

つづく?

NEXT→←NEXT（後書き）

orzごめんなさい。では。

動き出す不穏な…

薄暗い中、そのなかを歩く影が二つ。
先程旅を初め理想の世界を求め始めた二人だ。
ざく、ざく、と。

あるく音が薄暗い森に木霊した。
こんな暗いなか、何故歩いていかなきゃいけないのだ…、
と普通の人の大半はそう思うだろう。

しかし、この二人はそんなこと微塵も感じさせなかった。
少女が青年に話しかけている。

シークット「リーフ！この森鬱蒼としてるね！」

暗さに対する恐怖を微塵も感じさせない。
むしろ楽しんでるだろう…というように、好奇心が隠せないのだろう。

リーフ「…そりゃあそうだ。」

青年はぶっきらぼうに答えた。
多分何時もこのような感じなのだろうか。
そしてこの青年も、慣れているのだろう。

リーフ「森だからな。それに空が暗いし。」

電灯もない。

何故か青年はそんな暗い空を恨めしそうに見た。
その後に、疑問をぶつけた。

リーフ「それにオマエは怖くないのか？」

？？？と疑問をかけられた少女は首を傾げた。
青年は理解し辛かったか…、と言葉を改めた。

リーフ「えーと、何だ？薄暗い何が出るか分からない森の中を
怖くは思わないのか？ということだ。」

すると少女はやっと理解したように
相槌をうった後ににこにことしながらいった。

シークット「何が出るか分からないとか、楽しそうじゃない！
それに私…、あまり外出はしなかったし…。」

軽く考えすぎだろ…、と青年は心の中で心配した後に、
むしろ…、ビクビクしすぎよりは…ましか、と考えていた。

シークット「そうそう、その村とやらには何時頃に着くの？」

ざくざく…、歩きながらチラっと、地図を見た。
そして、一旦足を止めると、
睡眠をとらなければ夜の時間帯中には着くな。とのこと。

シークット「待って…まさか…睡眠の時間を…？」

リーフ「とらない、と言っているワケではない。とらなければ、と
言っているのだ。」

完全にとらないといっているわけではないらしい。
どっちかというと、とらないほうが好都合だ、という感じだろう。

シークット「……分かった。」

リーフ「…？何をだ？」

シークット「今日は睡眠なしで行く！」

まだ幼い彼女にとっては結構苦渋な判断だ。

リーフ「オマエ…成長期に睡眠時間けずるとどうなると知ってるか？」

シークット「…？」

青年は何の躊躇いもなく言い放った。

リーフ「背が伸びないぞ。」

シークット「う…べ、別に良いわよ！！背なんて…。」

彼女は既に妹と背が同じくらいで、身長ののびが他の人より遅い。

リーフ「一生×××ｃｍで良いのか？」

さらに追い討ちをかける一言。

シークット「…！殆どあってるから…言い返せない…！！」

くっそう…、と思うがあいにく青年は明らかに彼女より身長はかなり上だ。

リーフ「嫌ならちゃんと寝ろ。」

多分、彼なりの気の使い方だろう。多分。

シークット「はーい…。」

無理だろうと思いながらいつかぬかしてやる…！

と少し思った彼女だった。

今はまだ背伸びをしても追いつかないが、いつか…！！

だが、ここは時が止まった世界。

成長も途中で止まってしまうことや、成長しすぎることもある。

彼女自身、もう結構前から身長の伸びが止まってきている。

シークット「（……時が動き出せば、身長も伸びるわよ…きっと！）」

そんな考え事をしている間に、今日の野宿の場所を見つけたようだ。

リーフ「今日は、ここまでだな。」

そんなこんなで初日は、ここまで。

と、思ったらちょっと違った。

つづく？

動き出す不穏な…（後書き）

らんらんｒ（殴。
ｏｒｚ

しばしの休憩（前書き）

<p>

しばしの休憩

今さっき旅に出た二人、
シークットとリーフは、途中の森にて休憩をとっている…。
かなりくつろいでいる様だ。

青年と少女…リーフとシークットは今
休憩として焚き火をしていた…。
パチパチ…、と燃える火を見て、おお～…、と歓声を上げた。
リーフ「…焚き火ってそんなに珍しいのか？」
慣れた手つきで燃料を放り込んでいるリーフが
少し驚いたように質問をした。
シークット「ん～…火は使えさせてもらえなかったから…、
危ないって。こんなに火に近づいたのはじめてかも…。」
興味津々な目で燃える火を見つめている。
あぁそうか、コイツお嬢様だからな…、と独りでにリーフは納得し、
なおも火に近づくシークットを本当に危ないぞ、と注意した。
分かった。との返事の後、火を見て少しの疑問があがった。
リーフ「そういえば…魔法って、どういうのが使えるんだ？」

前に姿を隠してもらい少し不思議に思っていた。リーフ。
シークットはえ？と言った後説明を始めた。

シークット「えーとね…、魔術っていうのは殆ど属性技と同じなのよ。
あ、でも違うところが幾つかあるの。まずは、魔術の基はね、
属性技だとその個々の遺伝子や先祖のポケモン属性によって違うでしょ？」

あぁ、とリーフは相槌をうった。
ちゃ、ちゃんとついていけるかな…、でも、リーフだから平気よね、
と思い説明を再開した。

シークット「ところがどっこい。魔術はなんて言えばいいのかな…、
その前世の人が魔術師だったら継がれるみたいな感じなのよ。

因みに、前世は生まれ変わりのことね。」

リーフ「つまり、遺伝子には左右されないのか？」

シークット「いえーす！御名答ね、リーフ君。」

そう、笑顔で質問に返した。
良かった、ちゃんと分かってた。と思い少し安心した。

シークット「とりあえず、前世の人の力が直結する感じね。
あと、違いといえば…、属性は自分の属性の波動というかなんかを
操作して技とかを出すでしょ？

魔術はなんていうかな…うーん…
簡単に言うなら、代償が必要なのよ。」

リーフ「代償…？例えば？」

あの事は言っちゃいけないわよね、とりあえず、
あそこまでは言ってよし…ね、よし。

シークット「いい質問だね、えっと…ねぇ…。
主に使い主の体力、気力。でも魔術にもノーコスト、というのがあるの。
それは代償が要らないのよ。」

と、そこまで言い切る。
そこでリーフが質問をぶつけた。

リーフ「なぁ、それで気力や体力が少ない場合で魔術を使ったらどうなるんだ？」

ここは別に言っても大丈夫よね…、と
考えた後に言葉を放った。

シークット「勿論、死の危険が伴う。でも運がよければ
致命傷にならない部位が代償として破壊又は持っていかれることもあるわ。」

すると少し神妙そうな顔になったリーフ。

リーフ「破壊又は持っていかれるとはどういう意味なんだ？」
うーん…と。
と、下顎に手を当て少し考えた後、笑顔で回答をした。
シークット「例えばその代償の部位が私の手だとする場合。
破壊ならただの血塊に、もっていかれるなら…。」
そう言うと、自分の右手の手首を左手の人差し指で
切るようになぞった後、
シークット「今なぞった部分から上が忽然と姿を消す。
…どっちとしても大出血よね。」
そのときの…彼女の笑顔は少し哀しくも見えた。
リーフ「…厄介な能力だな…。」
シークット「…そうね、でも便利だし！あ、あともう一つあってね？
魔術というのは属性で言うと、超属性（エスパー）が一番強いの。
でも、習得さえすれば殆どの属性の技みたいなのを使える。」
そう言うとまた続けた。
シークット「例えば時空のブローチを使わなくとも…、」
と言うと手を上にかざし、何か詠唱をした。
その後に、手から液体が滴ってきた。…水だ。
シークット「こうやって水を出すことや…。」

今度は立ち上がり、つま先を地面に三回コツ、コツ、コツ、と軽くたたいた後、
少し、シークットの体が浮く。
シークット「浮くことも出来る。」
リーフ「今のはノーコストだよな？」
すこし驚いたように聞いたリーフ。
あたりまえだよー、と笑顔で返したシークット。
シークット「…私はね、この魔術は戦闘に使わないようにしているの。」
魔術というのは元々人を癒すための物だった、
と哀しげに語りだした。
…昔は、皆魔術を使えた。ポケモンもいっぱいいた。
でも、起こしてしまったんだ。人間は。
戦争、と言う名の過ちを…。

つづく？

しばしの休憩（後書き）

次回は戦争とかの説明…過去回想みたいなものです。
では！

魔術戦争からの、属性への変更。

でも、起こしてしまったんだ。人間は。

戦争、と言う名の過ちを…。

リーフ「…戦…争…。」

そう、深刻に表情が変わった後に…。

彼女の説明が始まった。それはとても…、まるで、

その時代に居たかのように。

何百年…いや、数え切れないほど前のお話。

ポケモンと人が仲良く暮らしていたの。

人々は、魔術、という物を皆持っていたわ。

人々はそれで人の傷を癒したり、ポケモンを癒したりして、

それは平和に暮らしていてね…。

ところが、ある日に。

魔術は、人の命も左右できることが発覚したの。

それを知ってしまった人々。

“力”を手に入れた人々は、だんだんと争うようになってしまった。

ポケモンバトル、というものがそのまた最古にあって。

それが一番物事を決定するときに使われていた手段なの。

…でも人々はポケモンより自分の魔術のほうが強いと過信した。

本当に、愚かよね。

そこから、もうポケモンは用無しのようになって、
殆どが野生になった。その時代にもうポケモンバトルは無くなった。

人々は魔術ですべてを片付けていった…。

ついにはね、パワースポット（魔力の溜り場）
をかけて、戦争を始めた。
それはとても悲惨だったわ…。何人も死んで、ポケモンまで死んだ。

そして、それを見かねて降りてきたのは、
魔術の始祖とされる人と、その護衛の賢者たち。

そしてその始祖は賢者と始祖の命と引き換えに、
皆の魔術を奪い去り、それを自分の体内に取り込んだ。
そのあまりの魔力に耐え切れずに体は……ただの、血塊になった。

…始祖も、賢者もね。

その血塊になった始祖と賢者をみた人々は、あまりの悲惨さに
自分たちの行いを心から反省したわ。

そして人々は元のように、ポケモンたちと暮らしていった。
すると、不思議なことが起こった。

自分の生涯一緒にいたポケモンの属性の技を、
自分の子孫たちが使えるようになったから。

原因は分からないけれど、これで終わりよ。
と言うと、少し笑ってお菓子を口へと運んだ。
リーフはというと、かなり深刻そうな顔をしている。
リーフ「…そう、だっだんだな…。」
シークット「…といっても、神話的な本で読んだだけだから…。」
と、お菓子を食べる。
マシュマロって、…火であぶると美味しい…。
リーフ「そういえばオマエは魔術を使えるんだよな？」
シークット「うん。ほわい？」
少し考えてから言った。
リーフ「オマエの前世は誰なんだ？」
……わ
分かるわけないじゃない；。
シークット「始祖か賢者七人のどれか！」
結構アバウトな答えだが、これしか分からない。
リーフ「それと…命を犠牲にする…つまり、自己犠牲の技もあるのか？」

実際、魔術は代償が必要だと言った。
だが、そうなるとその代償をわざわざ受けに行くような
技もあるのではないか…？そう思ったリーフ。

すると、シークットは、唇に自分の人差し指を持って行って言った。

シークット「…Ｔｏｐ　ｓｅｃｒｅｔ．」

珍しくマセ英語ではなく本場の発音の英語が出てきた。
そこから、ここから先は教えられないと隠す意思が分かる。

そこまで、隠そうとするなら仕方ないか…。

リーフ「…そうか。」

そう思うと、時計をちらりと見た。

リーフ「もう、寝る時間だな。」

そう言うとシークットはマシュマロを食べる手を止めて、
そうだねと笑った。

その笑顔に嘘は無かった。

つづく？

魔術戦争からの、属性への変更。（後書き）

何コレ？

火の番

パチパチ…、と火が静かに燃えている。
もう時間も真夜中の時刻だ。つまりもうそろそろ眠りにつく時刻。
シークットはごそごそと、バックの中を漁って寝袋を取り出している。
一方リーフは燃料を入れながら火を絶やさないようにしていた。
シークット「あれ？リーフは寝ないの？」
準備が終わったらしいシークットが話しかけてくる。
…寝るときもアームウォーマーらしき物は外さないのか。
と思いながら返答をした。
リーフ「あぁ、火は大事だからな。絶やさないようにしないと。」
火を見つめながら返す。何故か火を睨んでいるようだ。
その目を見ていると、何故火を睨んでいるのかが分かってくる。
シークット「あの…さ。」
属性的にも弱点だからね…、と思いつつも内心少し笑う。
火を睨んでいた目がこちらを向く。
リーフ「何だ？」
その様子から見て、これは確信へと変わった

自信を持ったシークットは、言い放った。

シークット「火、嫌い？」

いや一応これでも気を使ったつもりなのだが…。
これいがいにいう言葉が見つからなかった。

リーフ「……属性的な意味でな。」

と、ばれたか…、という感じにそう言った目は、
本当に火を嫌がっているようだった。
何かトラウマでもあるのか…、いや、触れないでおこう。
とりあえず…、嫌がってるんだし、一晩中はちょっとアレだと…。

シークット「私変わるよ？」

心配そうに見上げた。その時に、彼が最も火を嫌いとしている理由が、
ちょっと分かった。緑がかった色の髪にやけに目立つ一房の毛…？
毛なのかアレ。
が火に触れないように頑張っているのだ。

リーフ「いや、大丈夫だ。第一オマエが寝なくてどうする。」

そう言うリーフだが…、このままだとリーフの方も体力が尽きてしまいそうな、
そんな嫌な予感がする。それを阻止しようと反論をした。

シークット「でも…、…あ、じゃあ交代制は？」

人差し指を少し伸ばして、提案をしてみる。
自分にしては…良い提案じゃない、と思った。
リーフは頭を少し？きながら言う。

リーフ「いや、それは休憩とった意味ないだろ。」

はぁ…、と少し溜息を漏らしたリーフ。
にしてもコイツは人がいいな…、そんな性格の良さで騙されたりとかが心配だな。
知らない人にはついていくなよ。と心の中でそんな事を思いながら、次の言葉を紡ぐ。

リーフ「だから、俺はオマエの身長の事を気にかけて休憩をとったんだ。」

ちょっとグサっ、と来る言葉。でもまぁ、反論できないから良いか、と思いながら、
自分の思っている事を言った。

シークット「だってなんかさ…、そこの毛？が焼けちゃいそうじゃない。
それにちょっと寝るくらいでも大分楽になるし…。」

少し眠るだけでも身長は伸びるわ。と加えた。
実を言うと、口論になると最後はかならずリーフが折れている。
勝てないと悟ったのかリーフは少し口論した後に折れた。

リーフ「分かった、だが何時交代するのか？」

そうね…、と少し考える。結局、只今の時刻の九時と、出発時刻の

三時
ということなので、三時間ずつになった。
最初の火の番はリーフだ。目覚ましをセットして、三時間後にシークットが起床になる。
疲れていたのか、寝つきの悪いシークットが直ぐに眠ってしまった。

リーフ「……。」

眠る前の話、シークットは、Ｔｏｐ　ｓｅｃｒｅｔ　と言い、隠している事があった。
多分、自己犠牲の技というのは存在するのだろう。元々魔術自体が自己犠牲だ。
そんな、恐ろしい能力を持っているシークットが。
どうしてあんなに明るく語れたのだろう…。きっと、話すのも辛かったのか…。

心の中でシークットに謝罪をした。
暇つぶしにと思い、草笛を吹き始めた。

夢の中、ただ私は独り。
周りは真っ黒だ。何も、見えない。突如後ろから肩を掴まれた。
後ろを振り返った。ただただ真っ暗な中に誰かの影。

「…だ……誰？」

恐怖なのだろうか、掠れた声が、闇に響いた。
それは何も言わない。言わないまま、もう片方の腕を振り上げた。

真っ暗だがそれだけは光っていた。ナイフ、だ。

「…ッ…！」

目を瞑る。…何時までも衝撃が来ない。
ゆっくりと目を開くと其処には心臓に腹に雷撃を受け血まみれになっている…。

「い…嫌……。」

完全にパニックになったシークットはただ、走った。
何も音がしない空間に、聞きなれ始めた声が聞こえてくる。
その声に向かって、光に向かって、必死に走った。

すぅ、とシークットの瞼をゆっくりと開いた。
やはり、魘されていた様だ。少し髪が肌に張り付いている。
そんなシークットを見て、不安しか出来ない。

リーフ「大丈夫か？魘されてたぞ？」

リーフが呼びかけていてくれていた様だ。
ゆっくりと身体を起こす。

シークット「有難う、大丈夫。」

にしても…リーフが呼びかけてくれていなかったら、私は永遠に走

っていたと思う。
そう考えながら、火の前に腰掛けた。
シークット「丁度三時間だね、じゃあ私ね。」
そういうと、リーフが心配そうに言った。
リーフ「本当に大丈夫か？ちゃんと疲れはとれたか？」
そんなに聞かなくでもいいじゃない…、とシークットは無邪気に笑った。
不安だな、と思いつつも、再び慣れてきた寝るという習慣。
睡魔に耐えることも難しいか、と。心配をしながらも眠った。

リーフが寝静まった。あたりは、相変わらず真っ暗だ。
……、と静寂が訪れる。火を見つめながら色々と思いにふけた。
シークット「……。」
ただ暗い中に火の明るさのみが、少しの空間を照らしていた。

つづく？

火を見つめて。

すっかり静かになった。
相変わらず火は燃えている。

…、どうやって三時間暇を潰すの…！？などとそんな事を考えるシークットは、
内心その退屈に耐えられたリーフを何者だ…などと思ったりした。

シークット「…暇…。」

そう呟きながら、ふぅ、と溜息をついた。
言いながらも火は絶やさぬように、燃料を入れる。
じっとするのが苦手気味の彼女には結構骨の折れる仕事だった。

？「何？暇なの？」

驚いて、バッ、と後ろを向いた。
しかし誰も居ない。

？「驚かしてはいけませんよ。」

また聞こえる。いやこれは…、脳の中に直接聞こえる感じ…。
この前の時空のブローチの云々なのだろうか。
まさかというかこれが真相に近いだろうという確信。

シークット「…この前の…？」

少し、この前の現象がフラッシュバックして、恐怖というべきだろ

うか、
そんな感情が生まれていた。すると声は、
？「アンタこの子に何したのよ…。」
？「え？ちょっと身体借りただけだよw」
どうやら複数居るようだ。今、数えた感じでは三人。
だが多分時空のブローチ関係だと…。
少し考えた後、口を開いた。
シークット「十七人…。」
そう呟いた直後に、その誰かの声によく分かったねぇ。などと言われる。
そこまで嬉しくも無いお世辞だ。
？「別にわざわざ声に出さなくても聞こえますよ？」
そう言う誰か。そうなると、今までの心のうちも全て聞かれていたのか、と
少し不安になった。そういう風に考えていると、
先日身体を乗っ取った声が、聞こえてきた。
？「初心者というか初めてだからね、僕達の正体、これの特性を話すよ。」
その後に話せっていわれたからねぇ。と付け加えた。
…。自分の好奇心というか何かがざわめく。

？「どう？知りたい？」

そう、声は聞いた。
ただただ私は頷いた。

後悔を、せいぜいしないようにね。　と、誰かが呟いた…気がした。

つづく？

次の日、後悔の無い…

…目がうっすらと開く。
時計を見ると、眠ってから丁度三時間が経過していた。
寝坊しなくて良かったなどと心の中で内心ほっとしていると、
火の番をしていたシークットの事がふと頭によぎる。

寝ては居ないよな、流石に。確かにその可能性はかなり少ない。
その通りに彼女は起きていた。
起きたのに気づいたのか無邪気に笑いおはよう、と言った。

おはよう、と少し寝起きの頭で起き上がり、今日の出発の準備をした。

シークット「朝食作ったけど、いる？」

あぁ、頼む、という声が聞こえた。
人って起きているときにどんな無愛想な顔をしていても
眠っている最中は随分と穏やかな表情をするんだなぁ…、などと思っているシークット。
そう、考えながら朝食をよそる。

そして朝食中は大事な時間だ。
栄養補給も勿論の事、今日の計画について話し合う時間でもある。
話をすれば今日はその昨日言っていた村という所へ行くらしい。

リーフ「頑張れば、今日の昼の時間帯には着くかな。」

そう地図を見ながら言う。ふーん…、と言いながら朝食後のお菓子

をほおばる。
ちなみに外国のお菓子というのは嫌いだ。第一甘すぎる。
とりあえずは今日の目標、村。
午前何時ごろだろうか、時刻は見なかったが、出発をする。

バサリと豪快にローブを着るリーフ。
それを見て思う。金具が壊れそうね…、一応デザイン重視のだからね…。
今度少し改造をしようかなと重いながら、身体のサイズに合わない少し大きめな
ローブをちまちまと着て二人は今日も一歩を踏み出した。

…また、どこかの洞窟では。
レビアは何故か顔色が優れずに居た。
何も言わず、ただ、震える身体を岩に任せている。
恐怖という感情に近いのだろうか？
動悸を押さえつけて彼女は、言った。
レビア「……何で…あたしが…。」
嫌な汗が滲んだ。心を強く持てと自分に言い聞かせてもどうにもならなかった。

そして悲惨な状況な村。そこに独りの幼い少年が居た。
＊「……。」
ただただ泣く少年。その少年は、無傷だった。
人によって意見が分かれるような紫気味の桃色の髪が少年を慰める
ように、
少年の動きに合わせて揺れた。

つづく？

次の日、後悔の無い…（後書き）

エ…。

ただ紅い村。（前書き）

グロい…かもです。

ただ紅い村。

ザクザク…ただひたすらに歩いてゆく。
自分の身長に合わないローブが足に纏わりつく。
いわばもう引きずっている。
そんな事も気にせず、隣で歩くリーフに合わせて早歩きで歩く。
少し筋肉痛気味の運動不足だった彼女の足は正直結構きている。
だが、そんな事も気にせずに歩いていられるのは彼のおかげだ、と感謝している。

シークット「パンはパンでも食べられないパンってなーんだ？」

他愛も無い会話。
それだけで自分の足の痛みという感覚から離れられる。
リーフは少し考えた後述べる。

リーフ「…カビたパンか？」

そう少し神妙な顔をして答える。
予想通りの答えだ、と得意げな顔で答えと理由を述べる。

シークット「ぶー！カビたのならキメラがガツガツと食べてくれるわ。
正解は、フライパンでした！あ、理由は鉄だから。」

ただのとんちクイズじゃねぇか、とリーフは言った。
何となくそういう会話が楽しい。

またまた早歩きをしながらワイワイ話をしていてあっという間に時

間は過ぎた。
ふと、足をとめる。
自分の鼻に何かの異臭だろうか、そんなにおいがした。
うっすらとだがはっきりと分かる。…鉄？否、血か？物騒な答えを自分の頭の中で否定
しつつ、心の奥では……そういう風にも捉えていた。

リーフ「そろそろ村だ。…？シークット、どうした？」

なにやら何時もの表情と違い、少し真剣な顔をしているシークットに問いかけた。
ボーっとしているのだろうか、と思っていたのだが、少し違うようだ。
何でもないよ、と微笑む彼女は何時もと同じ笑顔だったが…、何かが違った。

シークット「その村って製鉄所とかあるの？」

唐突に聞かれる。製鉄所…？何故だろうか。
そう思いながらも答える。

リーフ「製鉄所は無かったな…、だが水晶が採れるという洞窟ならあったな。」

その製鉄所の意味を考えていた直後に、何故彼女から鉄というワードが出たのかが分かった。
少しのにおい、間違いない、血だ。
そっかぁ、という彼女に言う。

リーフ「少しここで待っていてくれ。村長辺りと会ってくる。」

そういうリーフ。ただ、何故此処で待つのかはよく分からなかった。
どうして？と聞いた。

リーフ「村の奴ら警戒心が強いからな…、俺が顔見知りだから話をした後オマエを
連れて行く。」

そう言いながらも、目には不安の色が隠せていない。
…、どうしたのだろう、と。

シークット「分かった。待ってる。」

そう、笑顔で返事をした。背中を向け走り出したリーフに、嘘つきと呟いたのは
きっと、聞こえなかっただろう。でも、本当に何があったのだろう？
気になるも動くなと言われているので動かずにその場に待機する事にした。
木に腰掛け、一口、ビスケットをかじった。

森が少しはれる。村の入り口だ。それは予想通りに…、散らばった人の、
血、血、肉、もう原型の分からない血塊もある。
自分は見慣れてしまったのだろうか、この惨状をと、少し落胆しながら、
至る所に目をやる。…見た感じ生存者は零だろうか？
足の踏み場もなく血に覆われた地面。数日経っている為かかなりの悪臭が襲う。

口と鼻をおさえながら進む。村の奥の方、村長の家だ。
確かめるまでもなく村長は死んでいる。
村長の家の奥の神棚。そこに手を合わせた。

ふと、一切れの紙が目に入った。
ゆっくりとそれを読む。

“村の生存者は水晶の隠し扉に”

それを見て生存者は居た、と希望がさした。
そしてその紙を手に村を出て一旦シークットの所へと戻った。

シークット「…お帰り、どう…だった？」

どうしようか、と口実を考える。
どっちかというと、彼女を傷付けたくない。
これ以上何かを抱えさせたくないとぱっと浮かんだ理由を言った。

リーフ「駄目だったな…警戒心が前にも増している。」
そう言った。嘘は得意ではない。悪い事だとは思っているが、
嘘で身を守る事もある。シークットはそうか…と少し残念そうに述べた後、

シークット「仕方ないわ、次の目的地は何処？」

と言った。その、あまり根に持たない性格に感謝をしながら次の目的地を述べた。

…、村に何があったのだろう？それしか思えなかった。

村へのルートを避けて通ろうとしているし、何か緊急の事態でもあったのだろうか？
そう考え事をしながらあるいていると、コツ、と小石につまづいてヨロリとよろけた。
とっさにもう片方の足を出してバランスをとった。だが、その足に、

シークット「ほわっ！？

グチャリ、という何かやわらかい物を踏んだ感覚。
少し、と言うかかなりの嫌な予感を押し殺しながら、恐る恐るその物体を見た。
足を上げると、少し粘着性があるのか、嫌な音をたてながら下に落ちた。

リーフ「？シークット大丈夫か…ッ…！？」

その物体は赤黒くて、少しピンクで…異臭をはなっていた。
これ…どこかで見たことがある。あの日、ロザリアが母を真っ二つに…、
切断されたおなかから…、おなかから……な…内…ぞ…う…。
恐怖に駆られながらも、そのひも状の元をたどると、元々人だったものが、
今となっては血塊となって…いた。
シークット「ぁ……え……い…ッ…！！」

一気にこみ上げてくる恐怖。
それによるフラッシュバック。怖い、という感情が心の全てを支配した。
まさか、村もそういう感じに…、と考えるだけでおぞましくなる。

リーフ「！見るな！！」
そう言い、その場から引き離した。
まさかこんな所にも死体があるなんて思いもしなかった。
青ざめた顔をした彼女は、何時もの強気なシークットと違って、
とても弱弱しく見えた。彼女は大丈夫、と言っているものの、見た
限り大丈夫ではない。

ただただ私は震える事しか出来なかった。
とても恐ろしくて夢だとでも思いたかった、現実だ。
認めろ、認めろ。
そんな自分に、弱い自分にそれだけ言い聞かせて、頭の整理をする。
ずっと、リーフが傍に居てくれて、その優しさがただ、辛かった。

それを、見つめる影が二つ。
＊「楽しくなってきましたね。」
怪しげに笑うフードの男。少女は何も言わず、光景を睨んだ。
＊「……。」
見ていた高台から降りる、と、何処かへと行った。

つづく？

ただ紅い村。（後書き）

やっぱ残酷な表現ありタグ付けたほうがいいかもですね。

現実を受け止めて。

数分、経ったのだろうか。
だんだんと頭の整理がついてきた。

シークット「…もう、大丈夫。」

それだけ言うと立ち上がった。こんな所で時間をロスする訳にはいかない。
大きく息を吸い薄寒い空気を吐いた。

シークット「よし、行こう。」

今の自分で出来る限りの笑顔を作った。完成度が低かったので見破れてはいるだろう。
でも今は、先に進む事しか出来ないから…。
少し、心配そうな目で見ていたリーフは、少しだけ安心したように言った。

リーフ「そうか…、そうだな。」

…、そういえば村には何があったのだろうか。

シークット「本当は村はどうなっていたの？」

その声は静寂の中、静かに響く。だがどこかにその声には覚悟があった。
私だってもうそこまで子供じゃない。そんな言葉が実際には言っていないが

言っているように感じ取れる。

リーフ「…皆殺し、だ。」

その目には憤りや悲しみらしき感情が混ざっていた。
嘘だと信じたい。だがこれは…まぎれもない現実だった。
心配をかけるわけにはいかない。

シークット「…そっか。」

そう言うと、だが。とリーフが言った。
そこで僅かながら希望が生まれる。その光は私達の道を照らしてくれるだろうか。
一枚の紙を見せたリーフ。そして言う。

リーフ「生存者が居る可能性が高い。」

僅かながらの希望、それは、
“村の生存者は水晶の隠し扉に”というひとつのメモ。

確か…、水晶が採れるという洞窟、そこなのだろうか？
あとは水晶の隠し扉。とりあえずその水晶の採れる洞窟とやらを目指して歩みだした。
だがそこに行くには村を横断しなくてはいけなかった。

リーフ「…もうすぐ村だ。覚悟はいいか？」

そう心配そうに聞いてくる。
怖いのはもう沢山だよ、だけど私は彼方の願いも叶えたいから。

シークット「大丈夫。」

それだけ言うと村へと入っていった。
それを誰かが、見ていた。

＊「……あれが…。」

つづく？

子守。

＊「……あれが…。」

そういうと、傍観していた誰かは自分の爪を噛んだ。
力が強いのか爪が割れた。

爪と指の肌の間から紅い液が出てくる。
それを動じず見つめると、舌ですくいあげ口に含んだ。
鉄の味。不味いとは思っていない。
そうして血の味を堪能下の後に先ほどの他人を思い出し笑う。
口角がつりあがり、まるで狂っているかのように、いやそれは既に狂っていた。

＊「結構可愛いじゃん、楽しめそう。」

クスクス…と気味の悪い笑いを浮かべ
それだけ言うと、また何処かへと　消えた。

一方、リーフとシークットの二人は紅く染まった村を歩いていた。
見ているだけでも、誰がやったのかは分からないがここまでやる理解が出来ない。

原形がない、原形…原形…げｎ…、何も考えないほうが良い。
そう、これは…もう人じゃなくなっていた。
何だろう、本当に血塊とはこういうことを言うのだろうか？

赤、見渡す限りの赤に塊。よく見てはいけないと思いつつも凝視してしまう。
すこし黒ずんできているその塊。表面はカピカピで、赤黒く不気味だ。
所々ピンクが混じっている…内臓…だろうか？
足元にコロリと何かが転がっていた。
それは、微妙な大きさの球体。白めの球体の真ん中辺りの黒く澱み、光と力を失ったその濁った瞳はこちらをじっと、見つめている。目が合った。
シークット「ッ…！！」
急速に悪化する心理状況に打つすべも無い。
だが、リーフの横を歩く。これが今のミッションでもある。
足が震えた、吐き気がする。フラフラと、足取りもおぼつかずにひたすら歩いた。
無言で、静かに歩みを進めていく二人はやっと、その洞窟とやらに着いた。
さっきの惨状とは違ってそこは普通の所だ。
リーフ「…大丈夫か？」
心配そうに顔を覗き込むリーフ。
シークット「大丈夫。」
心配を掛けたくない、と。ただそう言った。

まだ心配そうな顔のリーフだが、そうかと言うと、洞窟の中へと入った。
続けてシークットも入る。

水晶とは見たことは結構ある。ただ灰色の宝石。
時が動いていればいろんな色があったり、美しく輝いているそうだ。
最近は人工でそういうのが作れられているそうだが。

それが洞窟内に沢山あった。というか生えていたのだろうか？
原石は見たことが無かったので、少し驚いていた。
驚いてみているときに本来の目的を思い出した。

シークット「水晶の隠し扉…よね？」

そう、水晶の隠し扉という場所に生存者が居るという。
居るかもしれない、だが。
居る事を前提として進む。

リーフ「あぁ。だが全く分からないんだ。」

そう言いながら頭に手を当て考えているリーフ。
少し背伸びをしてメモを見た。

…確かに意味が分からない。

「停まっているものと飾り。」

紙にはそう書いてある。
とまっているものと、飾り…？

リーフ「分かるか？」

停まっているもの…、停まっているもの…。
？停まってるというと時くらいしか思い浮かばない…。

シークット「停まってるものなんて時位しか思い浮かばないなぁ…。
」

そう発言した。仮に停まっているものが時だとすると、飾りは…、
飾りといえば…？
首飾りとか、ブレスレットとか、指輪とか…。

リーフ「…時…か。」

そうリーフは考えている、また思考を再開した。
他には…、バレッタとかコサージュ、タイピン、ブローチ…？
ブローチといえば…、と言いながらちらりと右手首を見る。
この右手首を隠しているアームウォーマー改造物の下にあるのは…。

時のブローチ。…もし仮に停まっているものが時だとしたらもしか
したら…。
どうやら二人とも同じ考えだったようだ。同時に顔を合わせると、
二人は言った。

「「時のブローチ…？」」

そうはもった二人。

リーフ「オマエもそう思ったか。」

シークット「…仮に停まっているものが時だとしたら、ね…。」
そう言うと、そのヒントとやらをどうやれば水晶の隠し扉を見つけられるのかを
考え始めた。
――丁度良く邪魔者は訪れるものだ――
カツン、と二人の後ろで靴が鳴った。
―誰かは言う、「そうでもないと、楽しくないでしょう?」―
二人は振り返った。ある者には憎悪を、ある者には複雑な心境を生み出したそれも、
二人だった。
ヨノーレ「ご名答ですな。」
相変わらずうんくさい顔だ。とはいっても殆どフードで隠れている。
その隣にはかつての姉妹だった妹のロザリアがいた。
何も言えずに居た。
もう他人の様に見る敵対心のこもったロザリアの目を直視するのが怖かった。
リーフ「チッ…。」
すごく憎いものを見るかのようなリーフ。
私も、変わらなきゃ。そう考えた、脳に直接聞こえる声…この間の

属性達とやらだろう。

“ご名答ですなw”　“あ、それ似てるw”

こんな時まで…のんきなんだね、と心の中でしゃべる。
それだけで会話は成立する。
会話をしながら目の前の状況を眺める。このままだと確実に戦闘になるだろう…。

何故そこまで言えるかというと…既に両サイド武器の装備を完了しているようだからだ。
話を良く聞いてみよう…。

ヨノーレ「まだ生き残りがいたなんてね、ちゃんとチェックするべきでした。」

ロザリア「申し訳ありません、私のミスです。」

光の無い瞳がただ淡々と言葉をつむぐ。

ヨノーレ「その生存者とやらを殺す為にはシークットさんが必要なようですな…？」

シークット「全部殺したのはあなた達だったのね…。」

ただヨノーレは笑った。それ以外に誰がいるのです？
言いたい事は分かった、やっぱりこの人たちなんだなと確信した。

リーフ「…何をするつもりだ？」

分かりきっている事。だが一応聞く。
予想通りに答えは返ってきた。

ヨノーレ「村を、全滅させるためです。」

彼はきわめてにこやかにそう言った。

リーフ「人の命を何だと思っている…。」

そういったリーフの顔は、憎しみと過去の何かが渦巻いていたように見えた。

ヨノーレ「何でしょうね？とりあえず、そこのシークットさんを渡してください。」

毎度毎度この人は頭にくると言うか、自分は本当に彼が苦手なんだな、と改めて感じた。
死んでも彼の所へと行くのは嫌だ。

少女は笑顔で言った。

シークット「　お断りします♪　」

ただ、無邪気にわらったその笑顔にはなんとも言えない、威圧感があった。

つづく？

抉る。

少女は笑顔で言った。

シークット「　お断りします♪　」

ただ、無邪気にわらったその笑顔にはなんとも言えない、威圧感があった。

……。

ヨノーレ「そうですか、それは残念ですね。」

そううんくさい顔をしたヨノーレが言った。

まぁその後どういう展開になるのかは誰しもが予想がつくことだろう…。

では…、と言う言葉がヨノーレの口から吐き出される。

その次は大体予想がついている。察しが出来ている。

ヨノーレ「力ずくで奪うまでですね。」

本当に当たったー！！！！ちょっと当たって欲しくは無かった予想は見事に的中する。

その場の全員が武器を構える。

…ちょっと待って。

何で戦えばいいのかが分からない。武器といえばあることにはある

が、
拳銃は使いたくない。短剣、使い物にならない。弓、矢がない…。
“僕達呼び出せばいいじゃん♪”
突然に脳に響く言葉。それもいいのだが…。
私の身体全部乗っ取っちゃうんだもん…、怖いわ。
それもそうだろう、だが他に術は無い。
…仕方ない。
アームウォーマーらしき物を少し銜えて外す。
そして、あくまでも極めて懇願するように言った。
シークット「…お願い…力を貸して…！」
ふわりと薄くなって上に引っ張られるように意識が無くなっていく。
その時に誰かの、…他の属性の声が聞こえた。
“りょーかいっ。”
その声に安心した後に、ゆっくりと目を閉じて意識を手放した。

戦闘に入った。武器を構えなおす。隣のシークットは何かを考えていると、
目を閉じた。…まさかまた？前の属性変化、見た限り毒だった。
今回はどの属性が出てくるのだろうか…？
次の瞬間には彼女の見た目に変化があった。

髪は一瞬で漆黒に変わり、目もまた同じように変わった。
その漆黒の少女は言った。
シークット（？）「あ、君がこのこのパートナー？」
思ったより明るいがどこかしら、黒い感じの笑顔だ。
リーフ「あぁ。」
その少女は僕の事は悪で良いよ、と言った。その後にターゲットの確認をしだしている。
相手はというとまだ攻撃をしてこない。
悪「…じれったいなぁ～…、つまんないw」
そんな事を言いながらも武器など何も持たずに戦闘に望む悪。
どうやら、2対2だから配分は一人につき一人だ。
悪「僕あっちの餓鬼やるから、そっちのおっさん宜しく☆」
パチリ、とウインクをする悪。中身は違うとは言えど一応見た目はシークットだ。
微妙に動揺しながらあぁ、と言った。

＊「さて…これはどっちが勝つのでしょうね？」
そう言った誰かは黙り、窓のない真っ暗な部屋のすみを見た。

つづく？

☆少しだけの解説というか何か。

シークット「こんにちは。」

チャマー「こんばんは。」

風「おはようございます。」

えっと、今回はなんか疲れたので、説明です。

微妙な説明あたりをしたいと思います。
では、自分で読み返して意味不明というか、謎ばかりなところから…。

えと、未来編のいろんなちょっとあやふやな所…。

1、良く厨二な台詞を吐いていて、テイラと仲が良い（？）人について。

これは後に出ますが、結構な鍵ですw
敵か見方かは…どちらでしょうかね？

2、レビアについて。

えっと、セレビィですね。はい。凡人ですね…、ごめんなさい！！
でも結構活躍（する予定）します。
次の日、後悔のない…

では彼女の大きなターニングポイントがありました。
敵か見方かは…分かりますよね？

3、次の日、後悔の無い…の最後の子供について。

この子も結構鍵です。というか……。
何でしょうかね？とりあえずうん、餓鬼です。
敵か見方かは…まだ決めてません。

4、子守。の最初の人物。

1、の人とは別人です。
どちらの見方かは分かると思いますが、ちょっと原作ブレイカーかもです。
最後あたりに爆発的に出番が増えますね。

5、テイラについて…。

まぁ、書いてあった通りですね。
ヨノーレサイドの人間です。でもどちらかというとヨノーレは嫌いらしいです。
携帯の登録名が「くそやろう」ですからね…。

6、全体的に　わけがわからないよ。

ごめんなさい…、文章力が無いんです。
誰か下さいw

コレ位でしょうか？
また何かあったらというか誤字脱字、ここわけがわからないよとかがあったら言って下さい。
出来る限り訂正させていただきます…。
今回短いですね…すいません。では！

攻撃と逃亡は紙一重。（前書き）

（´・ω・｀）

…ネタがありません。

攻撃と逃亡は紙一重。

気がつくと、フィールドの上…というか、いわば、幽体離脱をしたような感じだ。
そんな感じに自分の身体（精神）が浮遊していた。

ちょっと下には戦っている黒くなっている自分とリーフ。
敵二人。

シークット「……頑張って…。」

そうつぶやくと、黒髪黒目の自分が振り返り、テレパシーか何かで伝えてきた。

悪〔心配なんて要らないから、暫くそれで待っててよね。〕

はーい、と返事をする。
にしても…、強いなぁ…、悪属性の私…。
私もあそこまで強ければリーフに苦労はかけないだろうなぁ…。

はぁ、と溜息をつく。
ふわふわと浮いている自分の身体（精神）は多分岩をもすりぬけるだろう。

ザッ、と洞窟内の砂利を踏む音。

戦いは一層激しさを増していた。
ロザリアが大鎌を振り下ろす。危ない、と息をのむが、
一方の悪は余裕の笑みだ。

地を蹴った反動で避ける。ザ、と地面に着いてまもなく次のステップを踏む。
少し高めに飛んだかと思ったら、驚いているロザリアの隙をついて、

つじぎりを繰り出した。

大鎌で払おうとするが、そのつじぎりの力が強いのか、
大鎌が飛ばされた。

チッ、というロザリアの舌打ちの後に、
私は目を瞑った。
どの技が炸裂したのかは分からない。が、次にはロザリアは傷を負っていた。
まぁ、悪の勝ちとなるだろう。

悪「やだなぁ、終わり？」

落ちた大鎌を手に取り、ニコニコと笑う。
まさか、と思い。

シークット「こ…殺すの？」

そう、言うとこちらを振り返り言った。

悪「どうする事も出来るよ？どうする？主体さん。」

戸惑う。出来ればその合間にロザリアが立ち上がって逃げてくれれば嬉しい。

相変わらずリーフとヨノーレは接戦中で。

シークット「……殺さないであげて…。」

本来は殺すべきだろう。

否、殺さなくてはいけない存在だ。

それを殺さないなど…なんて自分のなかでもそんな意見は物を言っている。

だが、それ以上に。

これ以上身内を失いたくないなどという、自分の甘ったれた意見が上回って

しまったのだ。

悪はまた笑うという。

悪「りょーかい。意識は飛ばしておいた方が良いよね？」

こくりと、頷いた後にまた目を瞑った。

いつかは自分もこんな事をしなくてはいけなくなると…。

それをただ認めたくなかったし、時間に、もう本当に停まって欲しかった。

ただ時間は残酷な程に過ぎて。

私は何も出来ずに、その道をただ歩いてゆくだけで。

鈍い、音がした。

悪「終わったよ。」

その一言で目を開ける。
気を失っている妹に少し心が痛む。

その少し離れた所では、ヨノーレとリーフが戦っていた。
今回は怪我が少ない。
だんだんリーフもヨノーレの攻撃の特徴を掴めてきたのだろうか…。

すると、突如にヨノーレが戦闘を中断した。

ヨノーレ「おや、ロザリアは倒れてしまったんですか。」

すると、リーフも戦闘を中断し、見た。

悪「……殺してはいないよ。意識がないだけ。」

その後にそこまで傷はないから全治5日あたりかな。
と付け加えた。

ヨノーレ「ご丁寧にどうも。」

悪「礼なら主体にいいな。」

笑いながら妹のほうに向かうヨノーレ。

その途中に彼の携帯が鳴り、メールを確認するなり言う。
ヨノーレ「残念ですな。今日は此処までだ。」
目を細めて内容を読んでいるヨノーレ。
ちょっとほっとした。
じゃり、と砂を踏む音。
倒れているロザリアを背負うと、それではと言い、また消えた。
悪「じゃー戻るよ。」
そういった途端に体が重くなって、怖くなって目を瞑った。
次の瞬間に目を開けると、自分の身体に戻っていた。
“じゃあね。”
そういう言葉に、有難うと言葉を返すと、声は途切れた。
心配そうに見るリーフに言う。
シークット「大丈夫、早く行こう？」
ありったけの笑顔でそれだけ伝えると、歩く。
掠り傷だろうか？微妙に腕に血が滲んでいた。
その微妙な痛みをものともせず、進んだ。
そのなんだろうか？
自分も知らない内に素直になれない。
他人に頼ってばかりいたくない、という精神は。

だんだんと自分を蝕んでいく。
そんな事にも、気付けずにもいる。今日、此の頃。

リーフ「そうだな、行くか。」

少しずつ歩みだした。
もう少しでまた光と出会えると信じて。

一方の、水晶のどこかに隠れている少女は、まだ怯えていた。

レビア「……じい、ばあ、皆…、本当にごめんなさい。」

ただただ肩を震わせている。
ただただ助けを待っている。

出来れば、助けに来ないで欲しい。
と、言うか、きてはいけない。

誰かの何かの術によって、薄れていく意識に、しっかりと明白に、
焼き付ける。

レビア「アンタが……ッ…。」

そして完全に意識を失った。

誰かは、それを見て笑った。ただただ狂った笑みを。

＊「次、起きる時に俺様の顔覚えていたら奇跡だね。」

そして、嘲笑するかのようにまた言う。

＊「ま、忘れないように精精頑張って♪」

周りの風景に溶かされるかのように、消えた。

つづく？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8537t/

ポケモン不思議のダンジョン～トキタンズ～キャラ設定＆未来編

2011年11月23日16時54分発行